

ひがし うね わら
東哇原第1遺跡(二次調査)

Higashiunewara1-2 Site

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

本書に掲載した東畦原第1遺跡（二次調査）は、平成14年度に発掘調査を行い、旧石器時代および縄文時代の遺構・遺物を確認することができました。特に旧石器時代の資料では、礫群・土坑に代表される遺構、ナイフ形石器や角錐状石器からなる石器群をはじめとして、この時代の歴史を紐解くと思われる資料も多数みられ、今後の旧石器時代研究に寄与するものと考えます。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、郷土を誇りに思う心情を育むとともに、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しております。最後になりましたが、調査にあたってご協力をいただいた関係各機関や地元の人々、ご指導ご助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮園 淳一

例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した東九州自動車道（都農～西都農）建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測等の記録は、永野高行、戸高幸作、藤木聡が行ったほか、発掘作業員が補助した。
- 4 本書に使用した遺物実測図は、一部の実測トレースを大成エンジニアリング株式会社に委託し、他は整理作業員の補助を得て永野が作成した。
- 5 本書に使用した実測図の浄書は、永野が行ったほか整理作業員が補助した。
- 6 現地での写真は、永野・戸高が、出土遺物写真は永野と今塩屋毅行が撮影した。
- 7 測量空中写真理化学的分析等は次の機関に委託した。
地形測量グリッド杭設定：㈱建設コンサルタントナガトモ
空中写真：㈱九州航空株式会社
テフラ分析植物珪酸体年代測定：㈱古環境研究所
- 8 本書に使用した略記号は次のとおりである。
S C…土坑 S I…礫群
- 9 本書で使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の1/50,000図をもとに、遺跡周辺地形図は日本道路公団作成の1/1,000図をもとに作成した。
- 10 本書で用いた座標は海拔高であり、方位は座標北（G. N.）を基本とし、位置図等の一部に磁北（M. N.）を使用した。本地域における真北との偏差は5° 5' である。
- 11 土色については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」に準拠した。
- 12 石器の石材同定については、本センターの赤崎広志の協力を得て永野が担当した。
- 13 本書の執筆編集は、宮崎県埋蔵文化財センター

の永野が担当した。

- 14 出土遺物その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

- 1 遺構の計測箇所は次のとおりである。
 - S C……………平面上端・下端、断面
 - S I……………礫平面、断面
- 2 遺物実測図の挿図の縮尺は次のとおりである。
基本的な縮尺……………1/2
最大長が1cm未満の石器……………1/1
- 3 遺物実測図以外の挿図の縮尺は次のとおりである。
 - 遺跡周辺図……………1/2,000、1/50,000
 - 土層断面図……………1/30、1/40
 - 確認調査トレンチ配置図……………1/1,000
 - 礫群実測図……………1/20、1/40
 - 遺物礫出土分布図……………1/400
 - 石材別遺物分布図……………1/500
 - グリッド図及び土層断面配置図……………1/500
 - 土坑実測図……………1/20
- 4 石器観察表における計測単位はcm（最大長・最大幅・最大厚）とg（重量）である。
- 5 石器実測図の中の記号表示を以下に示す。
 - 石器の節理面は一点鎖線で表示する。
 - 微細剝離が確認された部分は、|～|の記号を用いてその範囲を示す。微細剝離の観察は、肉眼により行った。
 - 「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に/ \の記号を示す。
 - 敲打痕、磨痕は別図の要領で記す。
- 6 礫・礫群属性図及び礫群観察表の各項目は以下の基準による。
(1)赤化度
非：赤化していない。
弱：部分的に赤化している（50%未満）。
中：赤化している（50%以上～80%未満）。
強：非常に赤化している（80%以上～100%）。

(2)完形度

A：100%～90%以上原形を留める。

B：90%未満～40%以上原形を留める。

C：原形の40%未満である。

(3)円磨度

円：全体的に角がなく、円形に近い。

亜円：割れ面等はあるが、50%以上が円、楕円形に近い。

亜角：割れ面等を含めて、50%以上が角張っている。

角：全体的に角張っている。

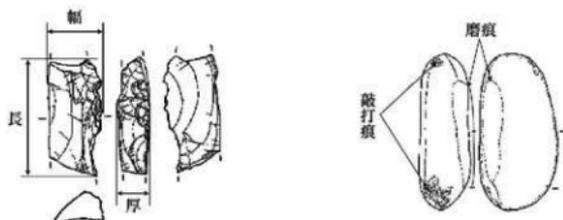
(4)形状

棒状：完形礫の場合、縦長の円柱形に類するもの。

扁平：完形礫の場合、棒状、球形のどちらにも類しないもの。

球形：完形礫の場合、球形に類するもの。

- 7 本遺跡出土の黒曜石の分類は、本センターの赤崎広志の協力を得て、渡部誠一郎が作成した別示の分類表に基づく。なお、報告書中の表記は、産地名で示した。



石器の計測部位

黒曜石の分類表

| 特 徴 | 産 地 | | |
|---|---------------|------|------|
| 黒っぽくなめらかなガラス質。薄片では、やや光を透過し、微小黒色粒が見られる。淡い縞状模様が見られることもある。 | 腰岳 | 佐賀 | 北西九州 |
| 暗灰色から濃褐色の、なめらかなガラス質。透過光でチョコレート色に見える。 | 桑ノ木津留、 上青木 | 鹿児島 | 南九州A |
| 暗青色から暗灰色。なめらかなガラス質。 | 針尾、淀姫 | 長崎 | 北西九州 |
| 灰白色から暗灰色。粒々した感じで透明ではない。 | 姫島 | 大分 | 北東九州 |
| 真っ黒で透明感がない。多孔質で不純物（砂のような）が多数入っている。 | 日東、 五女木 | 鹿児島 | 南九州A |
| 真っ黒でなめらかなガラス質。薄片でも光を透過しない。風化が進むと全体が灰色～暗灰色で凝灰岩的様相を示す。 | 上牛鼻 | 鹿児島 | 南九州B |
| 真っ黒で透明感がない。小片は、サイコロ状を呈していることが多い。 | 不明 | 南九州か | 南九州A |

- 8 東九州自動車道（都農～西都農）建設に伴う発掘調査の地層については、次に示す統一略称を用いる。
- ※ 頭に冠するM：宮崎平野を意味する識別記号（ML：ローム層 MB：黒色土層）

東九州自動車道（西都～都農間）関連の発掘調査における宮崎平野の基本層序

| No. | 略称 | 層名 | 年代 | 特徴 |
|----------|-------|-------------|---------|--|
| 1 | | 表土 | | |
| 2 | クロボク | 黒色土 | | |
| 3 | Kr-Th | 高原スコリア | AD1235 | 本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる。 |
| 4 | クロボク | | | |
| 5 | K-Ah | 鬼界アカホヤ | 6.5ka | 二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い。 |
| 6 | MB 0 | 黒褐色ローム | | |
| 7 | ML 1 | 暗褐色ローム | | |
| 8 | | 桜島産摩 (Sz-S) | 11ka | バミスは細かく、シャーベット状のブロックとなっている。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。 |
| 9 | | 褐色ローム | | |
| 10 | Kr-Kb | | 15ka | 小丸川以北では識別が難しくなる。 |
| 深年Ⅱ段丘堆積物 | | | | |
| 11 | MB 1 | 暗褐色ローム | | |
| 12 | ML 2 | | | 径2～3 cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。ATの二次堆積や、土壌化、腐植などの影響でAT本体より色が暗いと思われる。 |
| 13 | AT | 始良Tn | 24.5ka | 一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（始良大隅：A-Os）が見られる。 |
| 14 | MB 2 | 暗褐色ローム | | AT直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス（A-Fm, A-Ot）が密な部分が見られることがある。 |
| 15 | A-Fm | 始良深港 | 26.5ka | |
| 16 | A-Ot | 始良大塚 | 30ka | |
| 17 | MB 3 | 暗褐色ローム | | |
| 18 | ML 3 | 褐色ローム | | |
| 19 | | 赤褐色ローム | | |
| 20 | Kr-Aw | アワオコシ | 41ka | 赤褐色。スコリア、ラピリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリアを主体とする。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。 |
| 21 | ML 4 | 明褐色ローム | | |
| 22 | Kr-Iw | イワオコシ | 50ka | 赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。 |
| 雷野段丘堆積物 | | | | |
| 23 | | 明黄褐色ローム | | |
| 24 | | キンキラローム | | 黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。始良岩戸（A-Iw）の風化層。 |
| 25 | A-Iw | 始良岩戸 | 60ka | 粗粒砂大～径3 mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒。 |
| 岡富段丘堆積物 | | | | |
| 26 | Aso-4 | 阿蘇4 | 86-90ka | 阿蘇4火砕流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火砕流堆積物。風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。 |

*年代は、奥野充・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフロクノロジー」『人類史研究』12（2000）による。未校正。



1 遺跡遠景



2 調査区全景



3 第V期の石器



4 第IV期の石器



5 第III期の石器



6 第II期の石器



7 基本土層



8 AT 下位検出の礫群 MB2検出のSI910 (手前) と MB3検出のSI11 (奥)



9 AT 上位検出の礫群 MB1検出のSI7



10 MB2上部 (AT 直下) 検出の石器ブロック



11 Kr-Kb 検出の陥し穴状遺構 (半截)



12 Kr-Kb 検出の陥し穴状遺構 (完掘)

本文目次

| | | |
|-------|---------------------------|-----|
| 第I章 | はじめに | 1 |
| 第1節 | 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 | 調査の組織 | 1 |
| 第II章 | 遺跡の環境 | 3 |
| 第1節 | 地理的環境 | 3 |
| 第2節 | 歴史的環境 | 3 |
| 第III章 | 調査の経過と方針 | 4 |
| 第1節 | 確認調査の概要 | 4 |
| 1 | 調査の方法 | 4 |
| 2 | 調査の結果 | 4 |
| 第2節 | 発掘調査の方法と経過 | 6 |
| 1 | 調査の方針と方法 | 6 |
| 2 | 調査の内容と経過 | 8 |
| 3 | 調査日誌抄 | 9 |
| 第3節 | 整理作業及び報告書作成 | 12 |
| 1 | 整理の方針と内容 | 12 |
| 2 | 作業工程 | 12 |
| 3 | 整理の方法 | 12 |
| 第IV章 | 旧石器時代調査の記録 | 14 |
| 第1節 | 遺跡の概要 | 14 |
| 第2節 | 基本層序と文化層 | 16 |
| 第3節 | 第I期(MB3)の遺構と遺物 | 22 |
| 1 | 第I期の遺構 | 22 |
| 2 | 第I期の遺物 | 29 |
| 第4節 | 第II期(MB2)の遺構と遺物 | 34 |
| 1 | 第II期の遺構 | 34 |
| 2 | 第II期の遺物 | 38 |
| 第5節 | 第III期(MB1)の遺構と遺物 | 61 |
| 1 | 第III期の遺構 | 61 |
| 2 | 第III期の遺物 | 67 |
| 第6節 | 第IV期(Kr-Kb下部)の遺構と遺物 | 78 |
| 1 | 第IV期の遺構 | 78 |
| 2 | 第IV期の遺物 | 88 |
| 第7節 | 第V期(Kr-Kb上部)の遺構と遺物 | 97 |
| 1 | 第V期の遺構 | 97 |
| 2 | 第V期の遺物 | 99 |
| 第V章 | 自然科学分析 | 108 |
| 第1節 | 概要 | 108 |
| 第2節 | 宮崎県、東畦原第1遺跡二次調査における自然科学分析 | 108 |
| 第3節 | 分析結果の評価 | 117 |
| 第VI章 | 総括 | 118 |

挿 図 目 次

| | | |
|-------|---|----|
| 第1図 | 東畦原第1遺跡とその周辺 (S=1/50,000) | 2 |
| 第2図 | 確認調査の範囲 (S=1/2,000) | 5 |
| 第3図 | 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000) | 5 |
| 第4図 | 調査区の範囲と周辺の地形 (S=1/2,000) | 7 |
| 第5図 a | 基本第土層模式図 | 16 |
| 第5図 b | 第XIV層以下の土層模式図 | 17 |
| 第6図 | グリッド図及び土層断面配置図 (S=1/500) | 18 |
| 第7図 | 調査区北東部土層断面図 (S=1/40) | 19 |
| 第8図 | 南北ベルト土層断面図1) (S=1/60) | 19 |
| 第9図 | 南北ベルト土層断面図2) (S=1/60) | 20 |
| 第10図 | 東西ベルト土層断面図 (S=1/60) | 21 |
| 第11図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 石材別陳分布 (S=1/400) 及び陳属性図 | 25 |
| 第12図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 陳群実測図 (S=1/40) 及び陳群属性図1) | 26 |
| 第13図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 陳群実測図 (S=1/40) 及び陳群属性図2) | 27 |
| 第14図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 陳群実測図 (S=1/40) 及び陳群属性図3) | 28 |
| 第15図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 器種別遺物分布図 (S=1/400) 及び遺物分析図 | 30 |
| 第16図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 石材別 (ホルンフェルス) 遺物分布図 (S=1/500) | 31 |
| 第17図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 石材別 (砂岩・黒曜石・チャート) 遺物分布図 (S=1/500) | 31 |
| 第18図 | 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S=1/500) | 32 |
| 第19図 | 旧石器第I期 石器実測図1) (S=1/2) | 32 |
| 第20図 | 旧石器第I期 石器実測図2) (S=1/2) | 33 |
| 第21図 | 旧石器第II期 (MB2:第IX a層) 石材別陳分布図 (S=1/400) 及び陳属性図 | 36 |
| 第22図 | 旧石器第II期 (MB2:第IX a層) 陳群実測図 (S=1/400) 及び陳群属性図 | 37 |
| 第23図 | 旧石器第II期 (MB2:第IX a層) 器種別遺物分布図 (S=1/400) 及び遺物分析図 | 41 |
| 第24図 | 旧石器第II期 (MB2:第IX a層) 石材別 (ホルンフェルス・頁岩) 遺物分布図 (S=1/500) | 42 |
| 第25図 | 旧石器第II期 ホルンフェルス接合関係図 | 42 |
| 第26図 | 旧石器第II期 石器実測図1) (S=1/2) | 43 |
| 第27図 | 旧石器第II期 石器実測図2) (S=1/2) | 44 |
| 第28図 | 旧石器第II期 石器実測図3) (S=1/2) | 45 |
| 第29図 | 旧石器第II期 (MB2:IX a層) 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S=1/500) | 46 |
| 第30図 | 旧石器第II期 頁岩接合関係図① (接合資料38・55) | 46 |
| 第31図 | 旧石器第II期 石器実測図4) (S=1/2) | 47 |
| 第32図 | 旧石器第II期 石器実測図5) (S=1/2) | 48 |
| 第33図 | 旧石器第II期 石器実測図6) (S=1/2) | 49 |
| 第34図 | 旧石器第II期 石器実測図7) (S=1/2) | 50 |
| 第35図 | 旧石器第II期 頁岩接合関係図② (接合資料24・32・36) | 51 |
| 第36図 | 旧石器第II期 頁岩接合関係図③ (接合資料53・63) | 51 |

| | | | |
|------|-----------------------------|--|----|
| 第37図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(8) (S = 1/2)..... | 52 |
| 第38図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(9) (S = 1/2)..... | 53 |
| 第39図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(00) (S = 1/2)..... | 54 |
| 第40図 | 旧石器第Ⅱ期 | 頁岩・ホルンフェルス接合関係図④ (接合資料89・90)..... | 54 |
| 第41図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(1) (S = 1/2)..... | 55 |
| 第42図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(2) (S = 1/2)..... | 56 |
| 第43図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(3) (S = 1/2)..... | 57 |
| 第44図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(4) (S = 1/1)..... | 58 |
| 第45図 | 旧石器第Ⅱ期 | 石器実測図(5) (S = 1/2)..... | 59 |
| 第46図 | 旧石器第Ⅱ期 (MB2: 第IX a 層) | 石材別 (黒曜石) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 60 |
| 第47図 | 旧石器第Ⅱ期 (MB2: 第IX a 層) | 石材別 (尾鈴山酸性岩類ほか) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 60 |
| 第48図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別礫分布図 (S = 1/400) 及び礫属性図..... | 64 |
| 第49図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 礫群実測図 (S = 1/20) 及び礫群属性図(1)..... | 65 |
| 第50図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 礫群実測図 (S = 1/20) 及び礫群属性図(2)..... | 66 |
| 第51図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 器種別遺物分布図 (S = 1/400) 及び遺物分析図..... | 69 |
| 第52図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別 (ホルンフェルス) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 70 |
| 第53図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 70 |
| 第54図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石器実測図(1) (S = 1/2)..... | 71 |
| 第55図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石器実測図(2) (S = 1/2)..... | 72 |
| 第56図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石器実測図(3) (S = 1/2)..... | 73 |
| 第57図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石器実測図(4) (S = 1/2)..... | 74 |
| 第58図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別 (流紋岩) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 75 |
| 第59図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別 (黒曜石) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 75 |
| 第60図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石器実測図(5) (S = 1/2)..... | 76 |
| 第61図 | 旧石器第Ⅲ期 (MB1: 第VII層) | 石材別 (砂岩・チャート) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 77 |
| 第62図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石材別礫分布図 (S = 1/400) 及び礫属性図..... | 82 |
| 第63図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 礫群実測図 (S = 1/20) 及び礫群属性図(1)..... | 83 |
| 第64図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 礫群実測図 (S = 1/20) 及び礫群属性図(2)..... | 84 |
| 第65図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 礫群実測図 (S = 1/20) 及び礫群属性図(3)ほか..... | 85 |
| 第66図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 土坑実測図(2) (S = 1/20)..... | 86 |
| 第67図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 土坑実測図(3) (S = 1/20)..... | 87 |
| 第68図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 器種別遺物分布図 (S = 1/400) 及び遺物分析図..... | 90 |
| 第69図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石材別 (ホルンフェルス) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 91 |
| 第70図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 91 |
| 第71図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石材別 (黒曜石) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 92 |
| 第72図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石材別 (流紋岩・チャート) 遺物分布図 (S = 1/500)..... | 92 |
| 第73図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石器実測図(1) (S = 1/2)..... | 93 |
| 第74図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石器実測図(2) (S = 1/2)..... | 94 |
| 第75図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石器実測図(3) (S = 1/2)..... | 95 |
| 第76図 | 旧石器第Ⅳ期 (Kr-Kb 下部: 第VI bc 層) | 石器実測図(4) (S = 1/2)..... | 96 |

| | | | |
|------|---------------------------------|------------------------------|-----|
| 第77図 | 旧石器第IV期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 土坑実測図 (S=1/20) | 97 |
| 第78図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 石材別礫分布図 (S=1/400) 及び礫属性図 | 98 |
| 第79図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 器種別遺物分布図 (S=1/400) 及び遺物分析図 | 101 |
| 第80図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 石材別(ホルンフェルス)遺物分布図 (S=1/500) | 102 |
| 第81図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 石材別(頁岩) 遺物分布図 (S=1/500) | 102 |
| 第82図 | 旧石器第V期 | 石器実測図(1) (S=1/2) | 103 |
| 第83図 | 旧石器第V期 | 石器実測図(2) (S=1/2) | 104 |
| 第84図 | 旧石器第V期 | 石器実測図(3) (S=1/2) | 105 |
| 第85図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 石材別(黒曜石) 遺物分布図 (S=1/500) | 106 |
| 第86図 | 旧石器第V期 (Kr-Kb 上部: 第VI a 層) | 石材別(流紋岩・チャート)遺物分布図 (S=1/500) | 106 |
| 第87図 | 旧石器第V期 | 石器実測図(4) (S=1/1) | 107 |
| 第88図 | SC2陥し穴状遺構におけるテフラ分析及び屈折率測定試料採取箇所 | | 109 |
| 第89図 | 基本土層調査区東側壁面テフラ検出分析試料採取箇所 | | 109 |
| 第90図 | SI12礫群炭化物採取箇所及び試料採取基本土層の位置 | | 111 |
| 第91図 | SC2(陥し穴状遺構)炭化物採取箇所 | | 111 |
| 第92図 | 基本土層(調査区東側壁面)における植物珪酸体分析結果 | | 116 |

表 目 次

| | | |
|------|---|-----|
| 第1表 | 確認調査各トレンチ出土遺物・検出遺構 | 4 |
| 第2表 | 整理作業及び報告書作成工程 | 12 |
| 第3表 | 竈群一覧 | 14 |
| 第4表 | 土坑一覧 | 15 |
| 第5表 | 出土遺物（石器）の概要 | 15 |
| 第6表 | 出土竈の概要 | 15 |
| 第7表 | 第I期の竈群の諸属性(1) | 23 |
| 第8表 | 第I期の竈の群諸属性(2) | 24 |
| 第9表 | 旧石器第I期（MB3：第IX b層）の石器・石材組成 | 29 |
| 第10表 | 第II期の竈群の諸属性 | 34 |
| 第11表 | 旧石器第II期（MB 2：第IX a層）の石器・石材組成 | 38 |
| 第12表 | 第III期の竈群の諸属性(1) | 62 |
| 第13表 | 第III期の竈群の諸属性(2) | 63 |
| 第14表 | 旧石器第III期（MB 1：第VII層）の石器・石材組成 | 67 |
| 第15表 | 第IV期の竈群の諸属性(1) | 79 |
| 第16表 | 第IV期の竈群の諸属性(2) | 80 |
| 第17表 | 旧石器第IV期（Kr-Kb下部：第VI bc層）の石器・石材組成 | 88 |
| 第18表 | 旧石器第V期（Kr-Kb上部：第VI a層）の石器・石材組成 | 99 |
| 第19表 | SC2（陥し穴状遺構）及び基本土層（調査区東側壁面）におけるテフラ検出分析結果 | 109 |
| 第20表 | SC2（陥し穴状遺構）埋土におけるテフラの屈折率測定結果 | 109 |
| 第21表 | SC2（陥し穴状遺構）及びSI12（竈群）における放射性炭素年代測定結果 | 111 |
| 第22表 | 基本土層（調査区東側壁面）における植物珪酸体分析結果 | 115 |

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 遺跡遠景
- 2 調査区全景
- 3 第Ⅴ期の石器
- 4 第Ⅳ期の石器
- 5 第Ⅲ期の石器
- 6 第Ⅱ期の石器
- 7 基本土層
- 8 AT 下位検出の礫群
- 9 AT 上位検出の礫群
- 10 MB2上部(AT直下)検出の石器ブロック
- 11 Kr-Kb 検出の陥し穴状遺構(半裁)
- 12 Kr-Kb 検出の陥し穴状遺構(完掘)

巻末図版

- 1 遺跡全景161
- 2 第Ⅴ期の陥し穴状遺構(SC2)161
- 3 第Ⅳ・Ⅴ期の遺物出土状況161
- 4 第Ⅳ期の礫群①(SI1)161
- 5 第Ⅳ期の礫群②(SI3)161
- 6 第Ⅳ期の礫群③(SI4)162
- 7 第Ⅳ期の礫群④(SI5)162
- 8 第Ⅳ期の土坑①(SC1)162
- 9 第Ⅳ期の土坑②(SC3)162
- 10 第Ⅳ期の土坑③(SC4)162
- 11 第Ⅳ期の土坑④(SC5)162
- 12 第Ⅳ期の土坑⑤(SC6~8)162
- 13 第Ⅳ期の土坑⑥(SC9)162
- 14 第Ⅳ期の土坑⑦(SC10)163
- 15 第Ⅳ期の土坑⑧(SC11)163
- 16 第Ⅳ期の土坑⑨(SC11)163
- 17 寒冷紗を使った作業風景163
- 18 第Ⅲ期の礫群①(SI6)163
- 19 第Ⅲ期の礫群②(SI8と周辺遺物)163
- 20 第Ⅱ期の礫群(SI9・10)163
- 21 調査区全景および石器ブロック163
- 22 調査区全景第Ⅰ期調査面164
- 23 第Ⅰ期の礫群①(SI11)164

- 24 第Ⅰ期の礫群②(SI9~11)164
- 25 第Ⅰ期の礫群③(SI12)164
- 26 第Ⅰ期の礫群④(SI13)164
- 27 第Ⅰ期の礫群⑤(SI15)164
- 28 基本土層164
- 29 ML3下層の50%掘削164
- 30 第Ⅰ期の石器165
- 31 第Ⅱ期の石器①165
- 32 第Ⅱ期の石器②166
- 33 第Ⅱ期の石器③166
- 34 第Ⅱ期の石器④(接合資料89)167
- 35 第Ⅱ期の石器⑤(接合資料89)167
- 36 第Ⅱ期の石器⑥(接合資料31・87)168
- 37 第Ⅱ期の石器⑦(接合資料38)168
- 38 第Ⅱ期の石器⑧(接合資料38a・38b)169
- 39 第Ⅱ期の石器⑨(接合資料38a・38b)169
- 40 第Ⅱ期の石器⑩(接合資料36・55)170
- 41 第Ⅱ期の石器⑪(接合資料32・53)170
- 42 第Ⅱ期の石器⑫(接合資料24)171
- 43 第Ⅱ期の石器⑬(接合資料24a・24b・24c)171
- 44 第Ⅱ期の石器⑭(接合資料24a・24b・24c)172
- 45 第Ⅱ期の石器⑮(接合資料90)172
- 46 第Ⅱ期の石器⑯(接合資料88)173
- 47 第Ⅱ期の石器⑰173
- 48 第Ⅲ期の石器①ホルンフェルス174
- 49 第Ⅲ期の石器②頁岩・流紋岩・チャートなど174
- 50 第Ⅲ期の石器③(接合資料17)175
- 51 第Ⅲ期の石器④(接合資料15)175
- 52 第Ⅳ期の石器①(ホルンフェルス)176
- 53 第Ⅳ期の石器②(ホルンフェルス)176
- 54 第Ⅳ期の石器③(流紋岩・黒曜石・チャートなど)177
- 55 第Ⅳ期の石器④(接合資料10)177
- 56 第Ⅴ期の石器①178
- 57 第Ⅴ期の石器②178
- 58 第Ⅴ期の石器③(接合資料8)179

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都間)は平成9年12月に施行命令が出され、それに伴い平成10年度に県教育委員会が路線上の分布調査を行ったところ、計79箇所に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで、県教育委員会では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け、東九州自動車道(都農～西都間)の建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。平成14年度は、平成14年4月1日付けで、同公団九州支社と宮崎県の間で契約が締結され、平成14年5月20日より12月26日までの期間、宮崎県埋蔵文化財センターが、東睦原第1遺跡(二次調査)の本調査を実施することになった。

本調査に先立ち、平成14年1月30日から同年2月20日の内の14日間で確認調査を行った。面積約5,400㎡を対象とし、16のトレンチを設定して行った結果、調査区北東部のK-Ah残存域(約3,200㎡)では、同層上面で3基の土坑と1条の道状遺構が検出された。また、下層のKr-Kbや、AT下位のMB2・MB3からは石器が出土した。さらに、調査区南西部のK-Ah未残存域(約2,200㎡)からも、Kr-Kb、ML2及びAT下位のMB2・MB3から石器等が出土した。これらの結果をもとに、まず、調査区南西部のK-Ah未残存域の本調査を二次調査として実施した。なお、調査区北東部のK-Ah残存域は平成15年8月18日より平成16年3月31日までの期間に四次調査として本調査を実施している。

第2節 調査の組織

○ 東睦原第1遺跡(二次調査)の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会
所長 矢野 剛(平成13年度)
米良 弘康(平成14・15年度)
宮園 淳一(平成16・17年度)

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫(平成13～17年度)
副所長兼総務課長
菊地 茂仁(平成13年度)
大藪 和博(平成14～16年度)
総務課長 宮越 尊(平成17年度)
調査第一課長 面高 哲郎(平成13年度)
児玉 章則(平成14・15年度)
高山 富雄(平成16・17年度)
主幹兼総務係長 石川 恵史(平成15～17年度)
調査第一係長 谷口 武範(平成13～16年度)
主幹兼調査第一係長
長津 宗重(平成17年度)
調査第二係長 長津 宗重(平成13～16年度)
主幹兼調査第二係長
菅付 和樹(平成17年度)
総務係長 亀井 維子(平成13年度)
野邊 文博(平成14年度)
総務課主査 三谷 美徳(平成13～15年度)
安部 浩之(平成14～16年度)
甲斐 和也(平成17年度)
総務課主任主事 平田ユミ子(平成13～17年度)
上村 和枝(平成15～17年度)
主任主事(事務担当) 藤本 典昭(平成14・15年度)
主査(事務担当) 藤本 典昭(平成16・17年度)
主査(整理作業担当) 大村公美恵(平成13～16年度)
主査(調査担当) 永野 高行(平成13～15年度)
主査(調査担当) 福松 東一(平成13年度)
主査(調査担当) 戸高 幸作(平成14年度)
調査指導・協力(敬称略)
橋 昌信(別府大学)
佐藤 宏之(東京大学)
李 起吉(朝鮮大学校)
小畑 弘己(熊本大学)
長岡 信治(長崎大学)
長友 恒人(奈良教育大学)

調査協力 一ツ瀬土地改良区



- | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|
| 1 東畦原第1遺跡 | 2 唐木戸第3遺跡 | 3 唐木戸第4遺跡 | 4 小並第1遺跡 |
| 5 牧内第1遺跡 | 6 牧内第2遺跡 | 7 音明寺第1遺跡 | 8 音明寺第2遺跡 |
| 9 東畦原第2遺跡 | 10 東畦原第3遺跡 | 11 西畦原第1遺跡 | 12 西畦原第2遺跡 |
| 13 上祈開遺跡 | 14 勘大寺遺跡 | 15 永牟田第1遺跡 | 16 尾小原遺跡 |
| 17 向原第1遺跡 | 18 藤山第2遺跡 | 19 宮ノ東遺跡 | 20 瀬戸口遺跡 |
| 21 銀代ヶ道遺跡 | 22 七又木遺跡 | 23 溜水遺跡 | 24 藤掛遺跡 |

(1～19は東九州自動車道建設に伴う調査、20～24は新高宮町による調査)

第1図 東畦原第1遺跡とその周辺 (S=1/50,000)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

本遺跡の所在する新富町は、宮崎平野の北部に位置する児湯郡に属し、東に日向灘、北西から西にかけては九州山地に連なる山々と尾鈴山を仰ぐ。南部には一ツ瀬川の低地を横たえている。この地域一帯の段丘地形は、地形区分でいう茶臼原面・三財原面・新田原面の3つに分かれる広大な台地と丘陵地をなしており、鬼付女川によって刻まれた浸食谷や一ツ瀬川沿いの低位段丘面、さらには東部海岸地帯の砂丘や湖沼を並べた低地とともに町域を形成する。

東畦原第1遺跡(二次調査)は新富町大字新田字下迫口に所在し、鬼付女川左岸の三財原台地上の緩やかな傾斜地に立地する。標高は約90mで南西に向かって下っている。調査区周辺は町道を隔てた東側に南東方向に下る丘陵からの開析谷が接し、用水路を挟んだ西側にも南方向に緩やかに下る谷の存在が確認される。本遺跡は一次から四次の4調査域が設定されており、本遺跡は、西側の一次・三次調査域と隣接する東側の四次調査域の間に位置する。

第2節 歴史的環境

宮崎県児湯郡新富町が有する北西の洪積台地を始め、鬼付女川水系、日置川水系、一ツ瀬川水系に発達する段丘面状には、多くの遺跡が立地しており、太古から人類が生活しやすい環境が整っていたと思われる。一ツ瀬川左岸にある台地には、多くの古墳群が立地しており、その右岸には西都原古墳群が対峙している。本書で報告する東畦原第1遺跡(二次調査)は調査の結果、旧石器時代(第Ⅰ期～第Ⅴ期)の遺構や遺物が確認されている。そこで、本節では、同時期と推察される本遺跡周辺の遺跡について歴史的環境を概観する。

本遺跡周辺では、東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、多くの旧石器時代の遺跡が調査され、その当時の古環境や生活の状況を推定するための貴重な資料が整理されつつある。それ以前には、新田

原台地上の溜水遺跡で礫群が検出され、同時に尖頭器、細石刃、細石刃核等の遺物が出土しているものの旧石器時代の調査例は少なかった。1970年代には大野寅夫氏により、宮崎県を代表する細石刃核の標識資料として有名な「畦原型細石核」が表面採集されている。

近年では、東九州自動車道関連の発掘調査において多くの旧石器時代の遺跡が確認され、資料数も飛躍的に増加している。北から列挙すると、川南町の銀座第2、銀座第3(A地点)、湯牟田、高鍋町の野首第2、唐木戸第1・第3、小並第1、牧内第1、新富町の言明寺第2、東畦原第1・第2、西畦原第2、勤大時、尾小原、向原第1の各遺跡で調査が実施され、台地上の遺跡の実に9割以上で、旧石器時代遺跡が確認されている。その成果と傾向を概観すると、まず特筆すべき成果としては、県内においてこれまで確認事例の乏しかったAT下位のMB2～MB3の資料数が急増していることである。ただし、MB3下位は今のところ小並第1遺跡のAso-4の二次堆積中で炭化材が少量確認されたばかりは、石器群・礫群ともに未確認である。

礫群は、AT下位では比較的大きめの完型の円礫～亜円礫で構成され、非赤化礫の多い散漫な分布を示すが、AT上位になると、礫密度の高い破碎した赤化礫が多く検出している。また石器群は、AT下位のMB2下部からMB3では礫塊石器やナイフ形石器・剥片・石核等が多く、AT直下からKr-Kbでは、剥片石器の量が増加し、石器ブロック等の確認も多く報告されている。ナイフ形石器や角錐状石器等の明確なツール類の出土も多い。

以上のように、近年多くの発掘調査が行われ、AT下位までも視野に入れた旧石器時代の様相を知る貴重な資料が整いつつある。

第三章 調査の経過と方針

第1節 確認調査の概要

1 調査の方法

確認調査は、埋蔵文化財センターにより平成14年1月30日～2月20日の期間内に14日間を要して行われた。調査面積は、428.8㎡で全調査面積（5,391.28㎡）の約8%に当たる。

確認調査では、16本のトレンチを設定し、重機で表土（耕作土）を除去した後、人力で精査・掘削を行った。K-Ah 残存域ではK-Ah 上面での遺構確認と下層の土層堆積状況の把握に重点を置き、K-Ahの残存していない区域では、下層の遺物・遺構の確認（遺物包含層把握）に重点を置いた。特に本遺跡の隣接調査区の音明寺第2遺跡（二次調査）や東畦原第1遺跡（一次調査）では、AT 下位からも石器や礫、散礫、礫群等が確認されていることも十分加味しつつ調査に臨んだ。

2 調査の結果

調査区北東部（A区）、約3,200㎡にわたりK-Ahが良好な形で残存しており、同層上面において3基の土坑と1条の道状遺構の一部が検出された。また、下層の遺物・遺構確認と土層堆積状況確認のために

設定したトレンチでは、Kr-Kb からナイフ形石器や大型の剥片・礫が、AT 下位のMB2・MB3からは剥片が出土した。また、調査区南西部（B区）、K-Ahの残存していない区域約2,200㎡では、Kr-Kb から角錐状石器、黒曜石製の剥片等が出土し、AT 下位のMB2・MB3からは二次加工剥片やチャート製の剥片等が出土した。

包含層としては、A区でK-Ah・Kr-Kb・MB2・MB3の4層を確認し、B区でKr-Kb・MB2・MB3の3層を確認した。なお、今回の確認調査ではK-Ah 下位のMB0・ML1、Kr-Kb 下位のMB1・ML2、さらにはAT 下位のML3等の各層からは遺物・遺構等が確認されなかったが、周辺の遺跡では、同層中の遺物・遺構確認の報告もなされていることより、本調査の際には、25%調査を行いながら包含層や調査範囲を確定する必要性が確認された。

以上の調査結果を踏まえ、A区・B区を含めた調査域全面の本調査を実施することとなった。なお、調査面積と遺物包含層、さらには調査期間等を検討した結果、A区とB区の調査は時期をずらして実施することになった。そこで、まず、調査区南西部（A区：2,200㎡）を、先に調査を進めている一次調査との関連からC区と改め、東畦原第1遺跡の二次調査として本調査に取り組むこととなった。

第1表 確認調査各トレンチ出土遺物・検出遺構

| トレンチ | K-Ah | MB0 | ML1 | Kr-Kb | MB1 | ML2 | AT | MB2～ML3 | MB3 | ML3 | Kr-Aw |
|------|---------|-----|-----|-----------------|-----|-----|----|---------|-----|-----|-------|
| T3 | | | | | | | | チャート剥片 | | | |
| T4 | | | | | | | | 礫 | | | |
| T5 | | | | 剥片 | | | | 二次加工剥片 | | | |
| T6 | | | | 礫 | | | | 剥片・礫 | | | |
| T9 | | | | 角錐状石器 礫・剥片・礫 | 剥片 | | | | | | |
| T10 | | | | 剥片 | | | | 炭化物 | | | |
| T11 | | | | 剥片・礫 | | | | 礫 | | | |
| T12 | | | | | | | | 剥片 | | | |
| T13 | | | | | | | | | | | |
| T15 | 土坑1基 | | | | | | | | | | |
| T17 | 土坑2基 | | | | | | | | | | |
| T18 | | | | ナイフ形石器 | | | | | | | |
| T20 | | | | 剥片・礫 | | | | 剥片 | | | |
| T21 | 道路状遺構1条 | | | | | | | | | | |



第2図 確認調査の範囲 (S=1/2,000)



第3図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000)

第2節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方針と方法

本遺跡は、茶の栽培による削平のため、縄文時代以降の包含層は残存していない。したがって、旧石器時代を主体とする遺跡である。確認調査の段階では3層あった遺物包含層は、調査の過程で新たに追加されたMB1と2層に分けられたKr-Kb上層とKr-Kb下層・MB2・MB3の5層となった。25%調査を基本としながらも全包含層の100%を行い、出土遺物や検出遺構、さらには自然科学分析等に基づく当時の生活や文化の営みの考察、古環境の復元を図りたいと考えた。

調査区は、東畦原第1遺跡（一次調査）で設定されたA区・B区に続くC区（2,200㎡）で、国土座標に基づく10m×10mの大グリッドと5m×5mの小グリッドで設定した。大グリッドとは、国土座標に基づき10m間隔の測量された杭に囲まれた範囲であり、小グリッドは、この大グリッドを5m×5mに4分割したものである。これら大・小グリッドは、包含層の精査・掘削、遺物の取り上げ、図面作成、写真撮影、その後の整理・報告まで活用した。

発掘調査は、25%調査を基本とし、50%から100%へと進行した。25%調査とは、大グリッド1につき、小グリッド1を先行して調査するものである。先行調査するグリッドは原則として大グリッドの北西隅に決め、機械的に等間隔に設定した。

作業員は4～5人を一班とし、小グリッドの精査・掘削にあたる。基本的に包含層ごとに調査を行い遺物の出土状況や遺構の検出状況に応じて50%→75%→100%と調査範囲を拡大していった。そして、一つの包含層調査が終了すると、新たに25%調査を行い、下層の包含層の有無を確認した。

本調査においては、この25%調査を基本としながら、全ての包含層が100%調査へと進行した。

精査・掘削は、原則としてネジリ鎌を用い、数mmずつ水平にスライスしながら掘り下げた。掘削の過程で遺物・遺構密度の低い箇所は手鍬等を併用し、作業効率を上げた。

遺物は、製品（ツール）をB8サイズのラベル

付チャック袋に、鎌をビニール製ポリ袋に分別して収納した。表記は、遺跡名・出土グリッド・層位・遺物番号・器種・出土年月日を記入した。なお炭化物は検出した時点で竹串を刺し位置を示した。

遺物の取り上げは、全て点挙げとし、出土位置の記録はトランシットを用いて3次元的に行った。記録したデータはパソコンにダウンロードした後、遺物・鎌一覧表に整理し、ドットマップ（遺物・鎌の水平・垂直分布図）を作成した。取り上げた遺物は、遺物番号順にコンテナに収納し、鎌は11月から現場近くの東畦原整理作業事務所において、水洗い・注記・接合・計測まで行った。また、遺物も調査終了後、同作業事務所において水洗い・注記まで終了させた。

遺構は、全て実測・図化した。鎌群は平面図と見通し断面図を1/10で図化し、散礫も同様に1/20で図化した。また、土層断面を投影できる場合はそれらも併せて実測・図化を行った。土坑（陥し穴を含む）は平面図と半歳して分層した断面図を1/10で実測・図化した。また、図記録とあわせ、写真記録撮影も行った。

土層断面は、調査域の中央をグリッドラインに沿って東西南北に走るサブトレンチを設定し、1/20で実測・図化した。また、調査区東側の壁面に、本遺跡の全地層堆積状況を表出し記録した。これは本センターの地層研修の場としても有効活用された。

地形測量は、表土除去後のKr-Kb上面でコンタ図作成とあわせて行った。このコンタ図作成はAT除去後のMB2上面でも行った。

空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託し、実機（ヘリコプター）により行った。

自然科学分析は、植物珪酸体分析・テフラ分析・年代測定分析を古環境株式会社に委託して行った。

表土・無遺物層除去及び排土搬出・埋め戻し等は、すべて重機によって行った。また、作業中の排土は、ベルトコンベアにより調査区東側の排土置き場へ搬出し、作業の効率化を図った。

夏場は寒冷紗を活用し、作業員の健康及び体調管理を心掛け、作業の効率化・作業時の集中力維持に努めた。



第4図 調査区の範囲と周辺の地形 (S=1/2,000)

2 調査の内容と経過

旧石器時代を主体とする本遺跡は、AT上下にわたって重層的に包含層が形成されている。また、Kr-Kb・AT・Kr-Aw・Kr-Iw等の火山灰層も明確に確認できる。したがって、これらを鏡層として、各包含層の掘削を進めた。ここでは、調査の経過にあわせて、時代を遡る順序で報告する。なお調査に係わる委託業務や普及・研修活動についても経過に沿って順に略記する。

(1) 表土（耕作土）除去

重機による、K-Ah、MB0、MB1等、縄文時代以降の包含層は、茶の栽培による削平のため良好な形で残存しておらず、表土下Kr-Kb上面まで除去した。

(2) 排土運搬と地形測量1

表土除去に伴う排土を音明寺第2遺跡（一次調査）調査終了地まで搬出する。あわせて地形測量とKr-Kb上面でのコンタ図作成を行う。

(3) 旧石器第V期・IV期（Kr-Kb上・下位）調査

100%調査を行う。遺構としては第V期で土坑1基（陥し穴状遺構）、第IV期で礫群5基、土坑10基を検出する。遺物は、黒曜石製細石刃核と細石刃、石鏃、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片、石核、原石、敲石等が出土した。黒曜石製細石刃核と細石刃、石鏃は同層上部に集中し、Kr-Kb層を上下のV期とIV期に分ける根拠となる。

(4) 発掘体験（中止）

7月27日（土）日本道路公団九州支社宮崎工事事務所と本センター主催で開催予定であったが、台風9号・11号到来のため中止となる。新富町在住の小学校高学年児童とその保護者60人程度の参加予定で、旧石器の発掘体験をする計画であった。

(5) 旧石器第Ⅲ期（MB1）調査

100%調査を行う。遺構としては、礫群3基を検出する。遺物は、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片等が出土した。MB2上面までサブトレンチを設定し、同層上面ラインまでの土層断面図の実測を行う。

(6) AT除去

重機による。AT下MB2上層まで一気に除去した。

(7) 地形測量2

MB2上面でのコンタ図作成を行う。

(8) 旧石器第Ⅱ期（MB2）調査

100%調査を行う。遺構としては礫群2基を検出する。遺物は、ナイフ形石器、剥片、石核、原石、敲石等が出土した。AT直下から同層上層にかけて剥片・チップが中心の石器ブロックが1箇所確認された。

(9) 旧石器第Ⅰ期（MB3）調査

100%調査を行う。遺構としては礫群5基を検出する。遺物は剥片、石核、敲石等が出土した。Kr-Iw下の明黄褐色ロームまでサブトレンチを設定し、同層上面ラインまでの土層断面図の実測を行う。

(10) 自然科学分析（試料採取）

植物珪酸体分析・テフラ分析・年代測定分析を古環境株式会社へ委託して行う。

(11) 現地説明会

11月7日（木）音明寺第2遺跡（二次調査）と合同で行う。一般24人、新田中学校1年生49人、東証原整理作業事務所作業員10人の計83人の参加を得て、展示遺物見学・現場内遺構見学・旧石器発掘体験等を行う。

(12) 空中写真撮影

九州航空株式会社に委託し、実機（ヘリコプター）により行った。

(13) ML3・Kr-Aw・ML4調査

50%調査を行う。散在する礫（片）や流れ込みと思われる集中礫が出土したのみで、遺構・遺物は確認されなかった。

(14) 現場研修（旧石器地層・遺構・遺物）

本センター職員を対象に、宮崎平野の基本的な土層観察と土層に対応した基本的な遺構・遺物観察を行う。

(15) Kr-Iw下明黄褐色ローム調査

重機で上層を除去後、調査区北西部の20%調査を行う。大小の礫と粘質土が混在する礫層（段丘堆積層）である。最深度より湧水あり。

(16) 調査区を埋め戻し、撤収準備・撤収。調査終了。

| | |
|---|--|
| 3 調査日誌抄 (平成14年5月20日～12月26日) | 真撮影を行う。現在までに、礫群3基、土坑6～8基(1基は陥し穴、検討中のシミ状プランも含む)検出。6月末日までの遺物は136点、礫は116点出土。 |
| 5月20日 発掘調査開始。事務所・駐車場予定地及び進入路整地。 | |
| 5月22日 現場事務所、作業員休憩棟、資材庫、トイレ設置。発掘用具、資材等搬入。 | 7月3日 礫群(SI1～3)実測開始。 |
| 5月23日 発掘作業員の作業開始。調査区表土及び無遺物層除去作業開始。 | 7月8日 土坑3基認定。SC2は陥し穴である。サブトレ設定や半裁作業に入る。SH1～3検出中。 |
| 5月27日 表土及び無遺物層除去作業と並行して調査区壁切り、調査区周囲ロープ張り等、環境整備を行う。また、除去終了面の遺構検出作業も随時進める。今のところ遺構等検出されず。 | 7月12日 SC2と類似した土坑検出。 |
| 5月29日 表土及び無遺物層除去作業、除去終了面の遺構検出作業と並行して排土搬出作業開始。表土耕作土・MB0・ML1混在層より礫や礫片数点を確認。 | 7月16日 SC5～9実測開始。ベルコン先端部排土受け部にも寒冷紗設置(作業員の暑さ対策)。 |
| 6月3日 表土及び無遺物層除去作業終了。Kr-Kb上面より、黒曜石製細石刃、細石刃核、剥片(黒曜石、チャートを含む)、礫、礫片等出土する。 | 7月18日 SC9実測開始。T型サブトレを設定する。SH1～3は樹根の可能性大。 |
| 6月4日 排土搬出終了。排土置き場(音明寺第2遺跡～東畦原第1遺跡1次調査終了地)整地。測量委託業務開始。Kr-Kb25%調査開始。測量委託業務終了。地形測量、杭打ち、コンタ図作成等を行う。 | 7月23日 黒曜石剥片や細石刃、角錐状石器出土。SC2は約1.3m掘削。未だ底見えず。 |
| 6月6日 Kr-Kb上面より、黒曜石製細石刃核、チャート製剥片・チップ出土。排土運搬検査実施。 | 7月26日 発掘体験前日準備。耐風養生(台風9・11号) |
| 6月10日 橋昌信先生(別府大学)、佐藤宏之先生(東京大学)来跡。ベルコン稼働開始。 | 7月27日 発掘体験、台風9・11号のため中止。 |
| 6月12日 礫群2基検出。礫の密度は散漫で構成礫数も少ない。シミ状の遺構プランらしきもの検出。 | 7月29日 Kr-Kbの100%調査ほぼ終了。MB1の25%調査を開始する。7月末日までの遺物は323点、礫は217点出土。土坑もSC10、礫群SI5まで検出する。 |
| 6月13日 陥し穴らしき遺構プラン検出。 | 8月2日 AT上面までの精査・掘削開始。剥片・チップ・礫等出土。遺構等は未検出。 |
| 6月14日 寒冷紗組み立て・設置終了。シミ状の遺構プランらしきもの多し。 | 8月9日 SI6検出。石器を伴う。基部欠損のナイフ形石器2点出土。所長、課長現場視察。 |
| 6月20日 トランシットによる遺物・礫の取り上げ開始。遺物・礫は全て3次元点挙げとする。 | 8月12日 石核出土。SI6再検出。新たに石器3点混在を確認。 |
| 6月27日 南側のKr-Kb面遺物・遺構検出状況の写 | 8月13日 AT上部のML2も調査中であるが、遺構・遺物確認されず。密度低し。SC11実測中。 |
| | 8月19日 SC2、全断面検出作業開始。底部とその立ち上がりの確認が重要。東西ベルト上層断面実測開始。 |
| | 8月21日 SI7検出。石器を伴う。SC2底部確認。Kr-Iw下位まで掘り込まれる。 |
| | (8月23日 夏休み自由研究取材に親子3人と友人1人の計4人来跡。) |
| | 8月26日 SI8と周辺に展開する散礫検出。石器や |

| | | | |
|--------|---|-----------|--|
| | チャート原石が混在。 | | 動及び排土置き場整地。自然科学分析打ち合わせ。 |
| 8月28日 | 道路公団現場視察。遺跡概要、業務と組織、予算と執行状況等説明。8月末日までの遺物は639点、礫は411点出土。礫群SI8まで検出する。 | 10月29日 | 南北・東西ベルト土層断面実測終了。上新田中と現地説明会発掘体験等打ち合わせ。 |
| 9月3日 | 南北ベルト土層断面実測開始。(大学で考古学を学ぶ作業員の姪と母、友人3人が現場視察。) | 10月30日 | 陥し穴・礫群・遺物・東西南北ベルト・北側遺物集中区等は現地説明会が終了するまで残すこととする。10月末日までの遺物は1,062点、礫は640点出土。 |
| 9月5日 | 東西・南北量ベルト実測終了。清掃後写真撮影を行う。 | 11月1日 | 現地説明会環境整備。出入口、段差対策等安全対策と見学遺構等整備。 |
| 9月6日 | 調査区南側MB1の上層断面と遺構検出・遺物出土状況の写真撮影を行う。 | 11月5日 | 空中写真撮影打ち合わせ。長岡信治先生(長崎大学)地質調査・指導のため来跡。 |
| 9月9日 | MB1の100%調査終了。調査区全景の写真撮影を行う。 | 11月6日 | 調査区周囲壁面、ベルト断面壁切り、遺構等の清掃、展示遺物の確認等、現設準備仕上げ。 |
| 9月10日 | 重機によるAT除去作業開始。SC2(陥し穴)とSI7は残す。排土置き場整地。 | 11月7日 | 東畦原第1遺跡(二次)、音明寺第2遺跡(二次)合同現地説明会(12:30~15:30)。発掘体験で剥片等38点出土。 |
| 9月12日 | MB2上面遺構(検出)確認作業。調査区北側より100点近くの剥片等が出土する。 | 11月8日 | 現設用に残しておいた北東部集中区の精査開始。100点以上の遺物出土。 |
| 9月13日 | 調査区測量・杭打ち・25%グリッド設定。 | 11月11日 | 現設用に半裁状態で残しておいた陥し穴の完掘作業開始。埋土中より炭化物出土。 |
| 9月17日 | MB2、MB3の25%調査開始。 | 11月12日 | 空中写真撮影を行う。終了後、調査員でさらに写真撮影を行う。 |
| 9月19日 | SC2断面分層・実測開始。ナイフ形石器や黒曜石剥片も出土。 | 11月14・15日 | センター主催現場研修(旧石器時代調査)に並行しML3、Kr-Aw、ML4、Kr-Iwの25%調査も開始。今のところ、遺構・遺物等なし。 |
| 9月24日 | SI9、SI10、SI14検出。 | 11月19日 | 北東部集中区の遺物数600点に迫る。さらに出土中。他のグリッドは礫(片)多し。 |
| 9月25日 | 現場作業員対象の遺構・遺物説明会を行う。 | 11月20日 | 李起吉先生(朝鮮大学校)、小畑弘己先生(熊本大学)来跡。 |
| 9月27日 | 雨天のため作業中止。遺物・図面整理とトランシットデータのパソコンダウンロードを行う。9月末日までの遺物は861点、礫は518点出土。 | 11月21日 | 北東部集中区遺物出土のピークを越える。ナイフ形石器、石核、敲石等も出土。接合資料多し。 |
| 10月1日 | 散礫実測開始。寒冷撤去。 | 11月22日 | 長友恒人先生(奈良教育大学)来跡。 |
| 10月10日 | SI11検出。これまで、遺構は礫群のみ。遺物は石核、剥片、砕片等中心。 | 11月25日 | SI9~SI15の実測開始。構成礫はすべて点挙げとする。可能なものは断面投影も |
| 10月11日 | 大型の礫、一部欠損の認められるナイフ形石器出土。 | | |
| 10月16日 | MB2、MB3の両層より炭化物出土。年代測定の試料候補として4点採取。 | | |
| 10月18日 | 先端部欠損のナイフ形石器出土。MB2から炭化物1点採取。 | | |
| 10月23日 | 南北ベルト実測開始。 | | |
| 10月24日 | 東西ベルト実測開始。重機による排土移 | | |

- 行う。
- 12月2日 SI12検出面、IX a層より炭化物出土。SI12には、石核、蔽石も含まれる。
- 12月3日 北東部集中区拡張。さらに出土数が増える。調査区北東部より、剥片集中して出土（10点）。MB3より炭化物採取（MB3は2点目）現在までの遺物1935点、礫は737点出土。
- 12月5日 北東部集中域、拡張後も多数の剥片・碎片と共に原石、石核、蔽石、ナイフ形石器等出土。
- 12月9日 SI13は石核を伴い、構成礫数は50点。ML3～Kr-Iwは礫中心。時折小礫や小砂利の混在する粘質土層あり。SC2実測終了。
- 12月10日 K-Ah～Kr-Iw下の明黄褐色ロームまで観察できる調査区東側壁面の土層断面実測開始。
- 12月11日 SI9～SI15の実測全て終了。構成礫の点挙げも全て終了。北東部集中域出土遺物数も10点程となり、精査終了近し。
- 12月12日 土層観察用に置いていたベルトの精査・掘削開始。MB2、MB3より剥片出土。
- 12月13日 K-Ah～Kr-Iw下の明黄褐色ロームまでの断面実測終了。ML3～Kr-Iwの出土礫、約180点を点挙げ。遺物・遺構等は無し。
- 12月16日 K-Ah～Kr-Iwの50%調査終了。調査区北西部はKr-Iw下の明黄褐色ロームの25%調査実施。調査区北東部はKr-Iw下明黄褐色ロームの更に下層観察用のトレンチ設定。
- 12月18日 調査区北西部はKr-Iw下の明黄褐色ローム2グリッド調査する。水分を多く含む小砂利中心の粘質土で遺構・遺物等なし。さらにその下層は、大小の礫と粘質土が混在する礫層、段丘面堆積層で最深部より湧水も確認する。遺物2,321点、礫は1,066点出土。
- 12月20日 埋め戻し、撤収作業開始。
- 12月26日 埋め戻し、全ての撤収作業、安全点検と安全対策完了。発掘調査終了。

第3節 整理作業及び報告書作成

1 整理の方針と内容

本遺跡では、遺構として礫群15基、土坑11基（1基は陥し穴状構）が検出され、遺物等2,321点、礫等1,066点が出土した。特徴としては、①接合資料が多いこと、②AT下位と上位の礫群の在り方や石器群の様相にに変化が認められること、③AT下位のMB2～MB3にかけて石器製作に関係すると思われる石器ブロックが確認されたこと等が挙げられる。従って、整理作業もこれらの特徴を踏まえ、その成果を報告書に反映させることを念頭に置いて進めた。

これらの遺構・遺物を中心とした整理作業は、東睦原整理作業事務所と埋蔵文化財センターの2箇所で行った。東睦原整理作業事務所では、平成14年11月11日～平成15年4月28日の期間に、4人の整理作業員のもと、礫と礫群構成礫の《水洗い-注記-計測-計量-属性記録-接合-石材分類》と遺物の

《水洗い-注記》を行った。埋蔵文化財センターでは、平成15年5月6日～平成16年3月末日までの期間に5人の整理作業員のもと、遺物の《接合-実測-計測-計量-石材分類-トレース-レイアウト-写真撮影-図版作成》等を行った。なお、遺物のうち接合資料を含む208点は大成エンジニアリング株式会社にて実測・トレースを委託した。

2 作業工程

東睦原整理作業事務所と埋蔵文化財センターにおける作業工程は、第2表に示すとおりである。

3 整理の方法

礫と遺物に大別して記す。なお、礫には礫群構成礫も含め、遺物は石器と接合資料を中心としたものである。

(1) 礫

①水洗い 接合に支障のない程度で、ブラシやタワ

第2表 整理作業及び報告書作成工程

| 年度 | 平成14年度 | | | | | 平成15年度 | | | | | | | | | | | |
|------------------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 礫・礫群 洗浄・注記 | 1/23-4/1 | 2/3-4/1 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 | 1/2-3/4 |
| 計測・属性観察 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 接合 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 礫・礫群 石材分類 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 礫・礫群基礎 データ作成 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物 洗浄・注記 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物接合 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物計測 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物石材分類 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 実測 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺構・遺物基礎 データ作成 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺構トレース | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物トレース | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺構レイアウト | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺物レイアウト | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 写真撮影 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 本文作成 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 図版作成 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

シ、靴用柄付きタワシで泥を落とす。水洗い後、乾燥させる。

②**石材分類** 乾燥後、仮石材分類。チョークで識別。見た目の類似性を重視して分類。

③**注記** サインペン使用。層・グリッド・磔番号を記入。

※接合しても見えるように、礫面優先で。

④**計量・属性** 重量、赤化度、付着物、完形度、形状、円磨度等のチェック。

⑤**礫台帳記入** ②③④を受けて、全てのデータを記録・保存する。

⑥**コンテナ再収納** ②③④⑤は並行して行う。層別、石材別、グリッド別分類・整理して再収納。

⑦**接合** 石材ごとに5mグリッド内接合から開始。

10mグリッド、隣接グリッドへと接合範囲を拡大。

※割れ口観察のため(赤化、非赤化等)、再分解できるように、のり、ホットボンド使用。接着剤は使用しない。

※ 礫のみでなく、礫群内接合、礫群間接合、礫群—散礫(礫)との接合もこころみる。

⑧**接合関係図作成** 層ごと、石材ごとに接合関係を図化する。石材ごとに色をかえて線で結ぶ。

⑨**接合関係図分析** 石材ごとに接合状況(方向・距離・接合個数・接合密集域等)を分析し、再接合やその他の接合可能域を探る。

⑩**再接合** 関係図分析に基づき、最終接合を試みる。

(2) 遺物

①**台帳作成** 遺物番号、3次元座標、グリッド、出土層、種類、器種、石材等から成る遺物台帳を作成する。報告書作成の基礎データとなる。

②**水洗い** ブラシで傷等をつけぬよう留意しながら水洗。

③**注記** 遺跡名・調査区・グリッド・層・遺物番号を記す。注記位置は、礫面→裏面を原則とし、注記の困難な石器に関しては、遺跡名・遺物番号のみとする。さらに小さな碎片等については遺物番号のみとする。本遺跡からは碎片も多数出土したが、全ての遺物に注記をした。出土位置不明のものや点あげしなかった遺物は一括資料とした。

④**接合** 遺物を層ごと、石材ごとに分類し、グリッ

ドごとに作業を試みた。接合用具はのり、両面テープを使用した。折れ面のみでなくボジ面とネガ面等の剥離面相互の接合や、接合個体相互の接合等にも注意を払い、接合が全く認められなくなるまで継続した。接合資料は順に番号をつけて接合台帳に整理し、母岩認定、石材確定、剥片剥離の工程推定等の資料とする。

⑤**実測** 実測は業者委託とセンター内実測の2つに分けて行った。製品(ツール)や複雑な接合資料は実測委託とし、散石や剥片等は整理作業員と調査員で実測を行った。その際、外線・稜線等は作業員中心で行い、リング・フィッシャー実測と最終チェック・修正等を調査員が行った。

⑥**計量・計測・石材分類** 実測とあわせて遺物の重量、最大長、最大幅、最大厚、石材の最終分類を行った。計測・計量は碎片も含む全ての遺物を対象として実施し、石材は頁岩、流紋岩、ホルンフェルス、砂岩、黒曜石、チャートに大別した。結果は全て台帳に整理し、基礎データ化した。

⑦**トレース・レイアウト・写真撮影・図版作成**

製品(ツール)や複雑な接合資料のトレースは実測とともに業者に委託し、剥片や散石等のトレースは整理作業員と調査員が行った。また、写真撮影は本センター職員の今塩屋毅行の補助を得て、センター内写場で行った。レイアウト(仮レイアウト→本レイアウト)、図版作成はすべてセンター内で調査員・作業員が行った。

第IV章 旧石器時代調査の記録

第1節 遺跡の概要

遺物包含層は、ATを挟んで旧石器時代第1期から第V期までが重層的に展開する(第2節参照)。調査全体を通して、検出された遺構や出土した遺物の概要を以下に示す。

(1) 遺構

本遺跡では、遺構として15基の礫群と11基の土坑が検出された。15基の礫群の検出文化層、構成礫の個数・重量、接合関係は第3表に示すとおりである。全体的に構成礫の個数は少ない。礫群に関しては、このほかに属性として、「石材」・「赤化度」・「付着物」・「完形度」・「形状」・「円磨度」等も調査した。11基の土坑の、長径・短径・深さ・埋土中の含有物

については第4表に示した。SC2(第V期検出)以外の土坑はいわゆるシミ状の遺構プランとともに第IV期で検出された。全体の8割が長径・短径ともに1m未満で、深さも約8割が50cm未満である。埋土中からは3基の土坑において少量の炭化物が検出された。なお、SC2は陥し穴状遺構であると推定される。

これら礫群・土坑に関しては、その詳細を、第3節以降で記す。

(2) 遺物・礫

遺物に関しては、文化層ごとの個数・重量・接合個体数を第5表に示した。旧石器第II期が、遺物数、接合数の約8割を占めている。これは石器の集中域が存在したことによるのだが、剥片やチップが中心であったため、個数の割には総重量の占める割合が低くなっている。遺物に関しては、5つの文化層ご

第3表 礫群一覧

| 礫群 | 時期 | 層位 | 東九州層序 | 個数 | 重量(kg) | 掘り込み | 接合個体数(組) | 接合礫数(個) | 礫器群関節合(接合礫群) |
|------|-------|-------|------------|----|--------|------|----------|---------|--------------|
| SI15 | 第I期 | IX b | MB 3 | 14 | 8.620 | × | 0 | 0 | SI14 |
| SI14 | | | | 8 | 4.015 | × | 1 | 3 | SI15 |
| SI13 | | | | 49 | 22.640 | × | 4 | 8 | SI11 |
| SI12 | | | | 7 | 6.956 | × | 0 | 0 | SI11 |
| SI11 | | | | 20 | 13.100 | × | 0 | 0 | SI12・13 |
| SI10 | 第II期 | IX a | MB 2 | 11 | 9.420 | × | 0 | 0 | |
| SI 9 | | | | 9 | 8.435 | × | 0 | 0 | |
| SI 8 | 第III期 | VII | MB 1 | 13 | 3.140 | × | 3 | 6 | |
| SI 7 | | | | 50 | 7.390 | × | 14 | 30 | |
| SI 6 | | | | 29 | 3.675 | × | 5 | 19 | |
| SI 5 | 第IV期 | VI bc | Kr-Kb 中・下部 | 23 | 3.205 | × | 1 | 3 | |
| SI 4 | | | | 10 | 5.050 | × | 1 | 2 | |
| SI 3 | | | | 19 | 7.005 | × | 3 | 7 | |
| SI 2 | | | | 7 | 5.870 | × | 0 | 0 | |
| SI 1 | | | | 32 | 8.885 | × | 6 | 15 | |

第4表 土坑一覧

| 土坑 | 時期 | 層位 | 東九州層序 | 長径 (m) | 短径 (m) | 最深 (m) | 遺物等 | 炭化物等 | 備考 |
|------|------|--------|---------------|-----------|-----------|-----------|-------|-------|-------|
| SC 1 | 第IV期 | VI b c | Kr-Kb 中・下部 | 1.805 | 0.330 | 0.200 | × | × | |
| SC 3 | | | | 0.400 | 0.385 | 0.120 | × | ○ | |
| SC 4 | | | | 0.980 | 0.590 | 0.180 | × | × | |
| SC 5 | | | | 0.645 | 0.400 | 0.260 | × | ○ | |
| SC 6 | | | | 0.540 | 0.440 | 0.195 | × | × | |
| SC 7 | | | | 0.510 | 0.350 | 0.325 | × | × | |
| SC 8 | | | | 0.530 | 0.280 | 0.180 | × | × | |
| SC 9 | | | | 1.500 | 0.870 | 0.21 | × | × | |
| SC10 | | | | 0.410 | 0.250 | 0.22 | × | × | |
| SC11 | | | | 1.330 | 1.200 | 0.755 | × | × | |
| SC12 | | | | 第V期 | VI a | kr-kb 上部 | 1.310 | 1.215 | 1.715 |

とに器種・石材組成に基づく器種別分布図や石材別分布図等を作成している。

また、本報告書では、第6表に示した礫に関して、遺物同様の調査・分析を試みた。礫群同様、この他に、「石材」・「赤化度」・「付着物」・「完形度」・「形状」・「円磨度」等の属性についても調査してお

り、5つの文化層ごとに石材別分布図及び礫属性図を作成した。

これら、遺物や礫に関しても、その詳細は、第3節以降で示す。

第5表 出土遺物（石器）の概要

| 時期 | 層位 | 東九州層序 | 個数 | 重量 (kg) | 接合個体数 |
|-------|-------|-------|------|---------|-------|
| 第I期 | IX b | MB 3 | 104 | 1.926 | 5 |
| 第II期 | IX a | MB 2 | 1272 | 2.966 | 76 |
| 第III期 | VII | MB 1 | 115 | 4.344 | 5 |
| 第IV期 | VI bc | Kr-Kb | 83 | 1.318 | 9 |
| 第V期 | VI a | | 85 | 1.945 | 5 |

第6表 出土礫の概要

| 時期 | 層位 | 東九州層序 | 個数 | 重量 (kg) | 接合個体数 |
|-------|-------|-------|-----|---------|-------|
| 第I期 | IX b | MB 3 | 138 | 44.105 | 17 |
| 第II期 | IX a | MB 2 | 127 | 30.829 | 18 |
| 第III期 | VII | MB 1 | 314 | 40.213 | 25 |
| 第IV期 | VI bc | Kr-Kb | 139 | 12.665 | 12 |
| 第V期 | VI a | | 123 | 15.729 | 3 |

第2節 基本層序と文化層

本遺跡の基本層序は、ほぼ東九州自動車道（都農～西都間）基本層序に準じている。ただ、先にも述べたように縄文時代以降の包含層は茶の栽培による削平のため、調査区北東部の一部を除いて残存していないが、Kr-Kb以下の堆積状況は極めて良好で、AT・Kr-Aw・Kr-Iw等の鍵層も明確に確認できる。遺構・遺物を包含する層は後期旧石器時代の5層で、年代の古いものから順に第Ⅰ期から第Ⅴ期とした。また、基本層序は第Ⅰ～Ⅴ層に分けているが、第Ⅹ層のML3以下は無遺物層である。

なお、当時の植生や環境を復元するために、植物珪酸体分析やテフラ分析、年代測定を行っている。その結果については、各節の関連箇所随時記すとともに、第Ⅴ章に記載した。東駐原第1遺跡（二次調査）の基本的な層序は第5図aのとおりであるが、この基本土層模式図は削平された縄文時代以降の包含層も良好に観察できた調査区北東部の壁面によるものである。以下、各層ごとに概説する。

なお、土層断面配置図は第6図を、それらの土層断面図は第7図から第10図を参照されたい。

第Ⅰ層：表土（耕作土）

第Ⅱ層：黒色土層（Hue10YR2/1）。クロボク。さらさらとした触感。やや湿り気もあり、水分を含むと漆黒。茶の毛根片や下層のアカホヤ粒も混在する。茶の栽培のトレンチャーや茶の根による攪乱を受ける。

第Ⅲ層：黄褐色土層（Hue10YR5/6）。鬼界アカホヤ火山灰。やや硬くざらざらしており、層の下部に径5mm以下の火山豆石を含む。土層断面図（第7図）ではⅢaとⅢbに分層している。

第Ⅳ層：黒褐色土層（Hue10YR2/3）MB0に相当。やや硬くしまり、わずかに粘性を帯びる。上部に径2mm以下の黄褐色粒をまばらに含む。

第Ⅴ層：暗褐色土層（Hue10YR3/3）ML1に相当。第Ⅳ層よりも硬くしまる。

| | | |
|-------|-------|-----------------|
| | I | 耕作土 |
| | II | 黒ボク |
| K-Ah | III | 鬼界アカホヤ火山灰 |
| MB0 | IV | 黒褐色ローム |
| ML1 | V | 暗褐色ローム |
| Kr-Kb | VIa | 小林軽石上部 → 旧石器第Ⅴ期 |
| | VIb | 小林軽石中部 → 旧石器第Ⅳ期 |
| | VIc | 小林軽石下部 |
| MB1 | VII | 暗褐色ローム → 旧石器第Ⅲ期 |
| | VIIIa | AT風化層 |
| AT | VIIIb | 始良Tn火山灰 |
| MB2 | IXa | 暗褐色ローム → 旧石器第Ⅱ期 |
| MB3 | IXb | 褐色ローム期 → 旧石器第Ⅰ期 |
| ML3 | X | 明褐色ローム |
| Kr-Aw | XI | アワオコシスコリア |
| | XII | オコシローム |
| Kr-Iw | XIII | イワオコシ |
| | XIV | 明黄褐色ローム |

第5図a 基本土層模式図

第Ⅵa層：褐色土層（Hue10YR4/4）Kr-Kb上部。硬くしまり、粘性なし。Kr-Kbを含む暗褐色ブロックが散在する。

第Ⅵb層：褐色土層（Hue10YR4/4）Kr-Kb中部。硬くしまり、粘性なし。Kr-Kbを含む大小の暗褐色ブロックが密集している。

第Ⅵc層：褐色土層（Hue10YR4/4）Kr-Kb下部。第Ⅵa層、第Ⅵb層に比してやや柔らかめ。粘性はなし。Kr-Kbを含む。暗褐色ブロックがわずかに認められる。

第Ⅶ層：褐色土層（Hue10YR4/4）MB1に相当。柔らかくしまりが無い。やや湿り気あり。Kr-Kbを含まないやや硬質の暗褐色ブロックが密集している。

第Ⅷa層：暗褐色土層（Hue10YR3/4）。硬くしまり、粘性なし。斑状の暗褐色のシミが蜂の巣状に認められる。下位にはATの2次堆積を含む。

第Ⅷb層：黄橙土層色 (Hue10YR7/8) AT。給良 Tn 火山灰。粘性はなくさらさらしている。下位に白斑。その下にシャーベット状の橙色層を含む。下位の白斑は白色鉱物粒である。

第Ⅸa層：暗褐色土層 (Hue10YR3/3) MB2に相当。クラックが発達し、硬くしまる。白色の鉱物粒を多く含む。層厚が40cm～50cmと厚い。

第Ⅸb層：褐色土層 (Hue7.5YR4/3) MB3に相当。第Ⅸa層ほどではないがクラックが発達し、硬くしまる。白色鉱物粒はほとんど見られない。

第Ⅹ層：明褐色土層 (Hue7.5YR5/6) ML3に相当。柔らかくしまりが無い。やや湿り気はあるものの、粘性はない。経3mm以下のスコリアが散在し、下層(第Ⅺ層)に落ち込んでいる。

第Ⅺ層：赤褐色土層 (Hue10YR5/6) Kr-Aw。アワオコシ。細粒のスコリアを密に含み、硬い。上層に比して下層になると細粒スコリアがまばらになる。

第Ⅻ層：明褐色土層 (Hue7.5YR5/8)。オコシローム。やや硬め。経5mm～6mm以下のス

コリアが散在する。土層断面図中(第7図)には、一部イワオコシ混入層があり、(Ⅻ)としている。

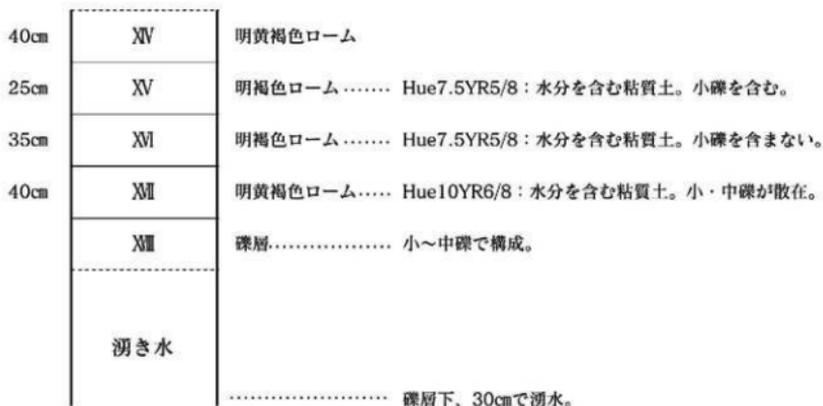
第Ⅼ層：赤褐色土層 (Hue7.5YR6/8) Kr-Iw。イワオコシ。極めて硬く、Kr-Aw に比べて粗粒。

第Ⅽ層：明黄褐色土層 (Hue10YR5/6)。湿り気あり(水分を多く含む)。粘性が強く、数mm～数cmの小礫や小砂利を多く含む。上層との境には5mm～10mm程度の黒色層(マンガンや鉄分が堆積したもの)が認められる。

なお、第ⅩⅣ層以下の層についても、調査終了時に調査区北東部の壁面下を重機にて約1.2m幅で掘り下げて調査をした(第6図d)。重機のバケットが届かなくなるまで掘削した結果、最終的にⅩⅧ層まで到達した。水分を多く含む小砂利中心の粘質土であるⅩⅣ層の下は、大小の礫と粘質土が混在する礫層、段丘面堆積層で、最深部より湧水が確認された。Aso-4は堆積していなかった。

以下、第5図bに略式模式図を示す。

土層断面は、調査区の中心を東西南北に走るベルトを設定し、記録・実測した。



第5図b 第Ⅻ層以下の土層模式図

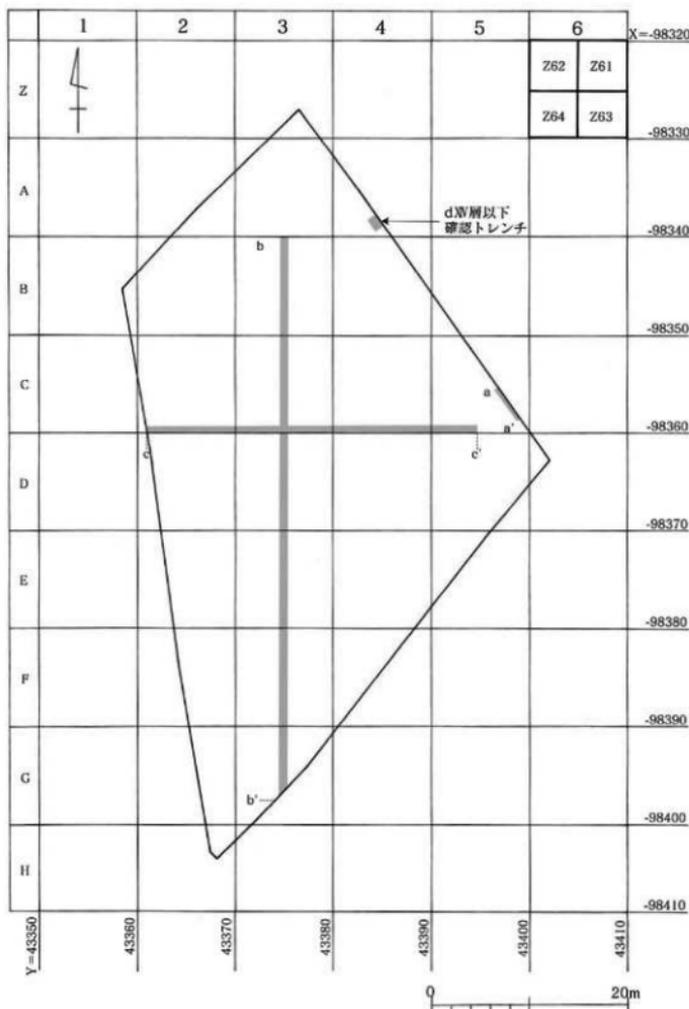
基本土層は、全層が良好に残る c-c' による。

a-a'・b-b' は旧石器第 I 期から第 V 期までを包含する第 VI 層の kr-kb から第 VII 層の明黄褐色ローム層までで、調査時の遺構・遺物の出土層の基準とする。

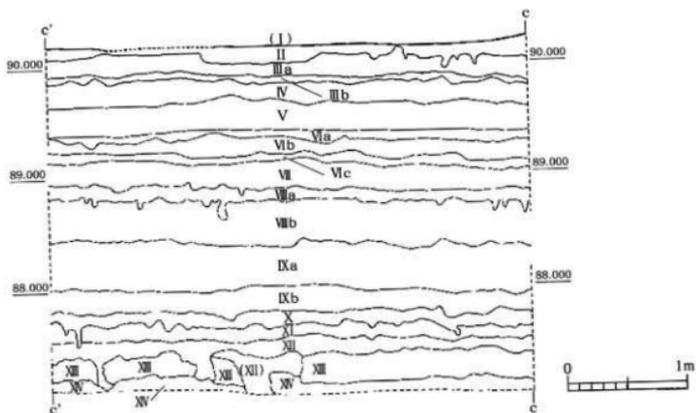
また、d は、第 VII 層以下の層の堆積状況を観察す

るための断面トレンチである。

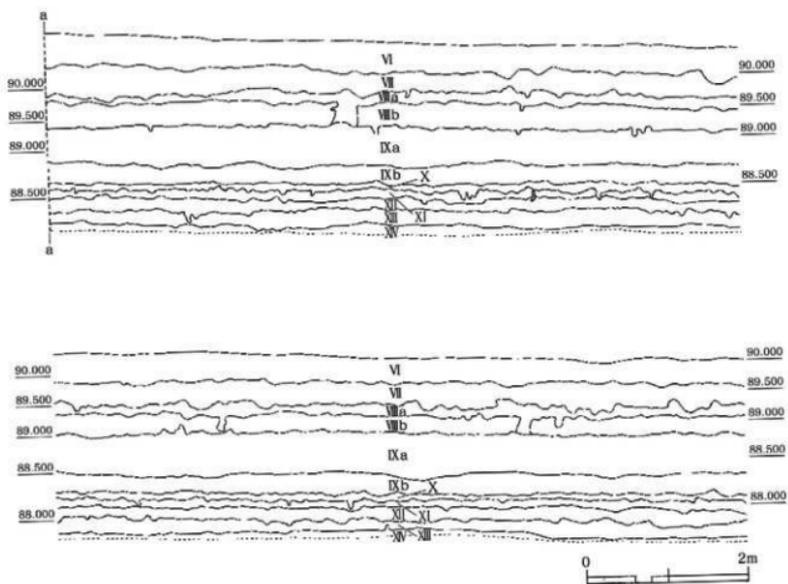
グリッドは、10m 単位で設定し、さらに 5 m 単位に 4 分割した。この 4 分割したグリッドは、さらに第 6 図の様に北に向かって右上から 1・2・3・4 と割り付けた。



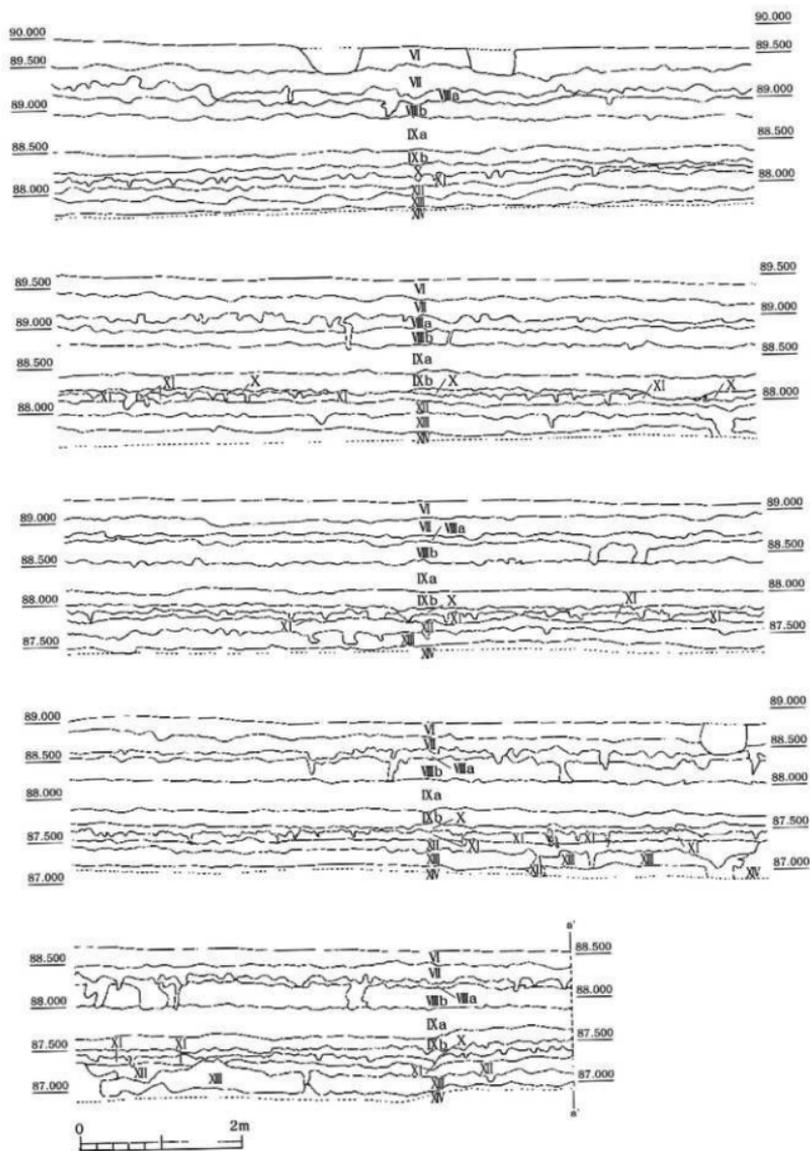
第6図 グリッド図及び土層断面配置図 (S = 1/500)



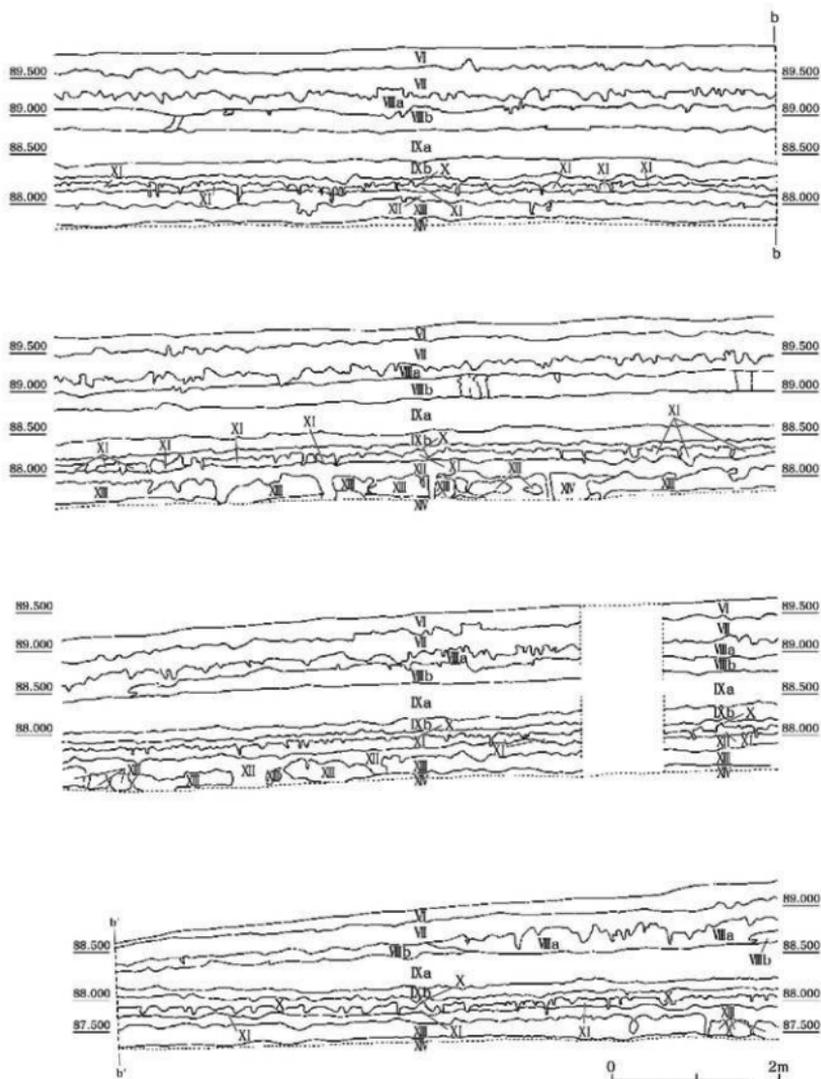
第7図 調査区北東部土層断面図 (S = 1/40)



第8図 南北ベルト土層断面図 (1) (S = 1/60)



第9図 南北ベルト土層断面図 (2) (S = 1/60)



第10図 東西ベルト土層断面図 (S=1/60)

第3節 第I期の遺構と遺物

1 第I期の遺構

遺構として、礫群が5基検出された。その概略は第3表に示したが、全体的な特徴として、比較的大きめの完形の円礫～亜角礫で構成され、礫の密集度が低く散漫な状態で検出されたことが挙げられる。構成礫の個数は、最大で49個、平均は約20個程度であり、礫群間での接合も確認されている。

第11図は、5基の礫群の分布状況と散礫の出土状況を示している。調査区中央より南側にSI11・12・13が分布し、北側にSI14・15が分布している。これは、散礫の分布状況ともほぼ一致しているが、散礫と礫群の分布の重なりはさほど認められない。

SI11とSI12・13、SI14とSI15で礫群間接合が確認された。

(1) 礫群

SI11 (第12図)

調査区中央、D33グリッドと隣接するD44グリッドにまたがって検出された。長径約4.5m、短径約2.5mの範囲に大小20個の礫が見られ、MB2(第IXa層)中に掘り込みは伴わず、ほぼ平坦に散在している。構成礫は、ホルンフェルス、砂岩が全体の8割強を占める。礫の総重量は13.1kgで、最大で3.57kg、最小で0.13kgを量り、ホルンフェルス、砂岩、尾鈴山酸性岩類がほぼ同割合で全重量の9割強を占める。また、ほとんどの礫は軽重の差はあるものの赤化しており、約5割弱の礫が90%以上の完形度を示す。礫群内接合はなかったものの、SI12・13との間で3組の礫群間接合が見られた。また、検出範囲内での石器等の出土はなかった。

SI12 (第12図)

SI11より、南東に約8m下る調査区南東部、E43グリッドにて検出された。長径約10m、短径約5mの範囲内に大小7個の礫が見られ、MB2(第IXa層)中に掘り込みを伴わず、ほぼ平坦に散在している。構成礫は、ホルンフェルス5点、砂岩2点のみで、総重量(6.956kg)の8割強をホルンフェルスが占める。全ての礫が中度以上の赤化をしており、

約7割の礫が50%以上の完形度を示す。礫群内接合はなかったが、SI11との間で2組の礫群間接合が見られ、検出範囲内に石核と敲石が各1点ずつ出土した。

SI13 (第13図)

SI11より、南西に約5m下る調査区南部のF31グリッド付近で検出された。長径約8m、短径約3mの範囲に、大小49個の礫が見られ、MB2(第IXa層)中に掘り込みは伴わず、ほぼ平坦に散在している。構成礫は、ホルンフェルスが全体の6割を占め、残りを砂岩、尾鈴山酸性岩類、頁岩が占めている。重量は、最大で、2.065kg、最小で10gと軽重の差があるものの、石材別に見てみるとホルンフェルスが全体の約7割を占める。ほとんどの礫が赤化しており、その度合いは弱・中・強はほぼ同じである。礫群内接合が4組あり、SI11との礫群間接合も1組見られた。また、検出範囲内に石核が1点出土した。

SI14 (第14図)

調査区中央よりやや北西部のC23グリッドにて検出された。長径約4m、短径約2mの範囲に大小8個の礫が、MB2(第IXa層)中に掘り込みを伴わず散在する。構成礫は、SI12と類似し、ホルンフェルス6点、砂岩2点のみで、総重量の8割をホルンフェルスが占める。他の礫群同様、軽重の差こそあれ全ての礫が赤化しており、完形度も50%以上を示す。礫群内接合が1組、SI15との礫群間接合が1組見られた。また、検出範囲内に敲石が2点(第20図10(831))出土した。

SI15 (第14図)

SI14の北3mのC32グリッドとC21グリッドにまたがって検出された。MB2(第IXa層)中の長径約7m、短径約1mの範囲に、14個の礫が散在する。構成礫は、砂岩が個数で約6割以上、重量で約5割を占める。赤化は中程度が約半数を数えるが全ての礫に認められ、完形度もやや高い。各礫が広い範囲内に数個ずつのまとまりで間隔を置いて分布するが、礫群内接合、礫群間接合ともに確認できなかった。また、検出範囲内での石器等の出土も無い。

第7表 第1期の礫群の諸属性(1)

| 礫群番号 | 番号 | 石 材 | 赤化度 | 付着物 | 完形度 | 形状 | 円磨度 | 重量 | 備 考 |
|------|----|---------|-----|-----|-----|----|-----|------|------------|
| SI11 | 1 | 尾鈴山酸性岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 3570 | |
| | 2 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜角 | 350 | |
| | 3 | 頁岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 335 | |
| | 4 | — | — | — | — | — | — | — | 欠番 |
| | 5 | 砂岩 | 弱 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 205 | SI12-5と接合 |
| | 6 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 160 | |
| | 7 | 砂岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 円 | 270 | |
| | 8 | ホルンフェルス | 中 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 220 | SI13-20と接合 |
| | 9 | ホルンフェルス | 中 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 930 | |
| | 10 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 370 | |
| | 11 | 砂岩 | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 410 | |
| | 12 | 砂岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 135 | |
| | 13 | 砂岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 円 | 430 | |
| | 14 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 690 | |
| | 15 | その他 | 中 | 無 | A | 扁平 | 円 | 380 | |
| | 16 | 砂岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 725 | |
| | 17 | 砂岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 890 | |
| | 18 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 865 | |
| | 19 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 角 | 585 | |
| | 20 | ホルンフェルス | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 860 | |
| | 21 | 砂岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 720 | |
| SI12 | 1 | — | — | — | — | — | — | — | 石核(1859) |
| | 2 | — | — | — | — | — | — | — | 殿石(1860) |
| | 3 | 砂岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜角 | 995 | |
| | 4 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 角 | 905 | |
| | 5 | 砂岩 | 強 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 130 | SI11-5と接合 |
| | 6 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 3630 | |
| | 7 | ホルンフェルス | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 170 | |
| | 8 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 885 | |
| | 9 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 250 | |
| SI13 | 1 | 砂岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 240 | |
| | 2 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜角 | 1030 | |
| | 3 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 155 | |
| | 4 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 790 | |
| | 5 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 250 | |
| | 6 | 砂岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 1410 | |
| | 7 | 頁岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 130 | |
| | 8 | 尾鈴山酸性岩類 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜角 | 1095 | |
| | 9 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 105 | |
| | 10 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 680 | |
| | 11 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 1785 | |
| | 12 | 頁岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 55 | |
| | 13 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 2065 | |
| | 14 | 砂岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 50 | |
| | 15 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 265 | |
| | 16 | ホルンフェルス | 強 | 無 | C | 扁平 | 角 | 545 | |
| | 17 | 砂岩 | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 300 | |
| | 18 | ホルンフェルス | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜角 | 185 | |
| | 19 | ホルンフェルス | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 125 | |
| | 20 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 300 | SI11-8と接合 |
| | 21 | 尾鈴山酸性岩類 | 強 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 1225 | |
| | 22 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 225 | |
| | 23 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 角 | 990 | |
| | 24 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 285 | |
| | 25 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 円 | 350 | |
| | 26 | 尾鈴山酸性岩類 | 弱 | 無 | B | 球 | 亜円 | 140 | |
| | 27 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | C | 扁平 | 亜角 | 60 | |
| | 28 | — | — | — | — | — | — | — | 石核(2304) |
| | 29 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 635 | |
| | 30 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 亜角 | 1955 | |
| | 31 | 砂岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 140 | |

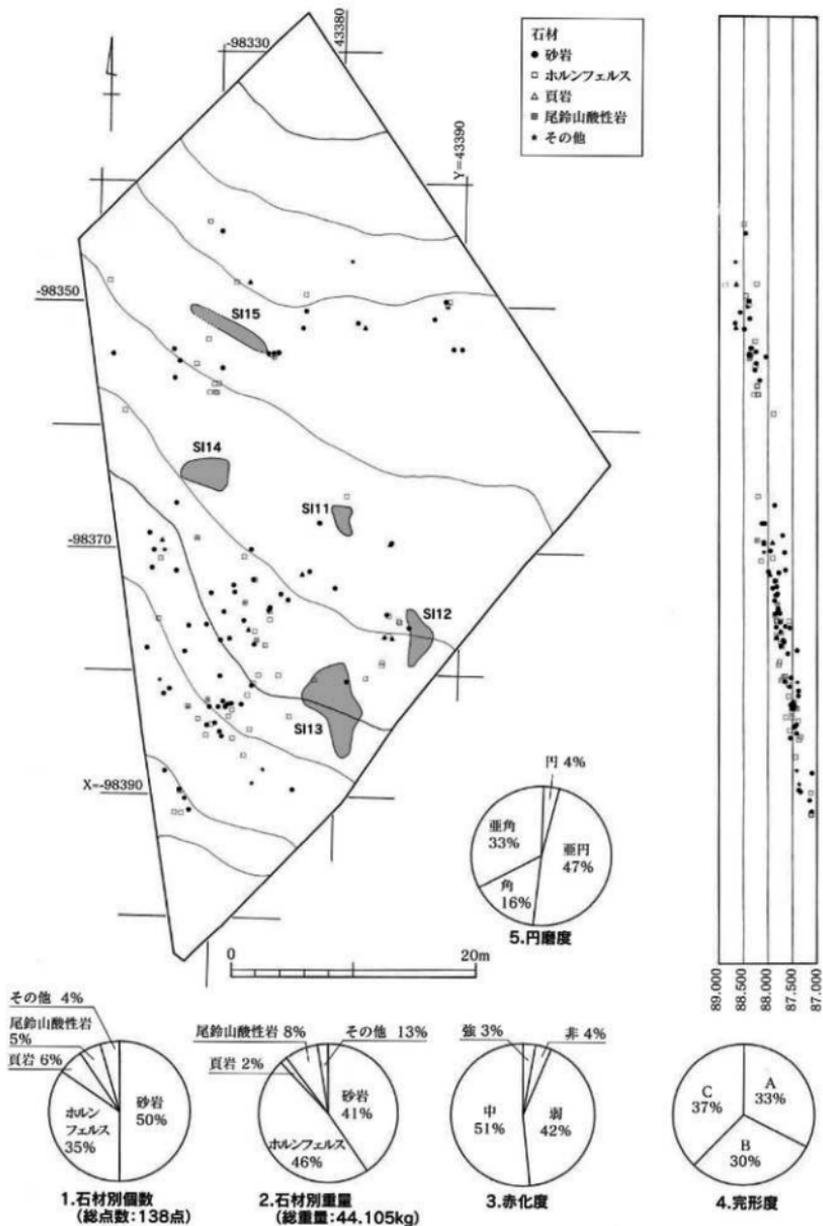
第8表 第1期の礫群の諸属性 (2)

| 礫群番号 | 番号 | 石材 | 赤化度 | 付着物 | 完形度 | 形状 | 円磨度 | 重量 | 備考 |
|------|------|---------|---------|-----|-----|----|-----|------|------------|
| SI13 | 32 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | C | 無角 | 10 | | |
| | 33 | ホルンフェルス | 強 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 70 | |
| | 34 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | B | 扁平 | 垂角 | 560 | |
| | 35 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 165 | |
| | 36 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 垂角 | 470 | |
| | 37 | 砂岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂角 | 110 | |
| | 38 | 砂岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 130 | |
| | 39 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 655 | |
| | 40 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 390 | |
| | 41 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 255 | |
| | 42 | 尾鈴山酸性岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 円 | 165 | |
| | 43 | 尾鈴山酸性岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 195 | |
| | 44 | 砂岩 | 強 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 135 | |
| | 45 | 尾鈴山酸性岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 垂角 | 885 | |
| | 46 | 頁岩 | 弱 | 無 | B | 楕 | 垂円 | 145 | |
| | 47 | 砂岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 45 | |
| | 48 | ホルンフェルス | 非 | 無 | A | 扁平 | 垂角 | 200 | |
| | 49 | 砂岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 160 | |
| | 50 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 330 | |
| | SI14 | 1 | ホルンフェルス | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 305 |
| 2 | | ホルンフェルス | 中 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 480 | |
| 3 | | ホルンフェルス | 弱 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 25 | |
| 4 | | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 920 | |
| 5 | | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 1315 | |
| 6 | | 砂岩 | 中 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 405 | |
| 7 | | — | — | — | — | — | — | — | 散石 (832) |
| 8 | | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 楕 | 垂円 | 225 | |
| 9 | | — | — | — | — | — | — | — | 散石 (831) |
| 10 | | 砂岩 | 弱 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 340 | SI15-10と接合 |
| SI15 | 1 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 975 | |
| | 2 | 砂岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 200 | |
| | 3 | ホルンフェルス | 中 | 無 | B | 扁平 | 角 | 1105 | |
| | 4 | 砂岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 垂角 | 1240 | |
| | 5 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 160 | |
| | 6 | 砂岩 | 強 | 無 | C | 扁平 | 垂円 | 310 | |
| | 7 | 砂岩 | 強 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 60 | |
| | 8 | ホルンフェルス | 中 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 60 | |
| | 9 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 95 | |
| | 10 | 砂岩 | 弱 | 無 | C | 扁平 | 垂角 | 165 | SI14-10と接合 |
| | 11 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 円 | 250 | |
| | 12 | 頁岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂円 | 2235 | |
| | 13 | その他 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 垂円 | 165 | |
| | 14 | 砂岩 | 強 | 無 | B | 扁平 | 垂角 | 1600 | |

(2) 散 礫

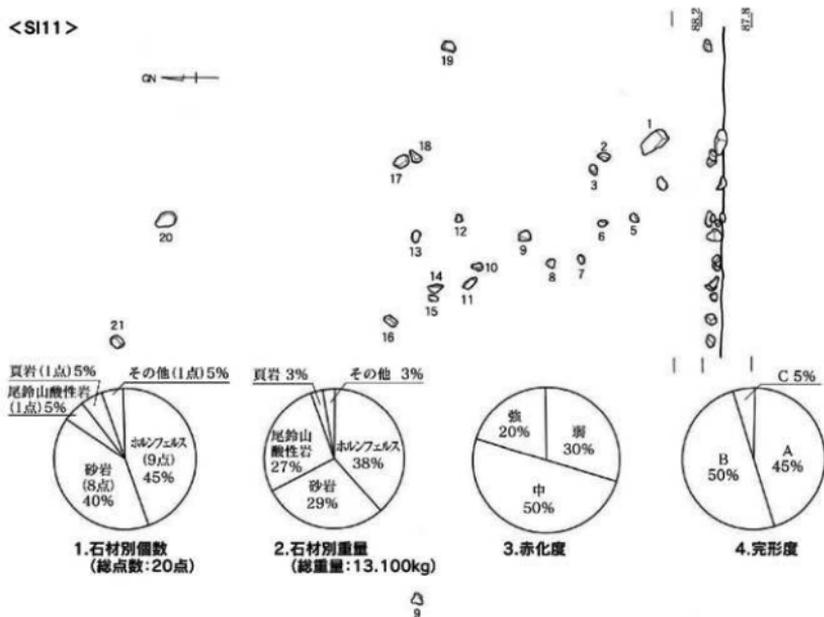
第11図に石材別の散礫分布状況と属性を示した。その分布は、調査区の中央よりやや北側部分と、中央より南側部分（南西部）に分かれ、特に後者の方に集中している。これは調査区の地形によるもので、北から南に傾斜する斜面に沿った流れ込みがあったと思われる。石材に着目してみると、砂岩、ホルンフェルスが全体の85%を占め、重量も全体の90%近くを同石材がほぼ同じ割合で占める。また、ほとん

どの礫が赤化するが、その度合いは中以下が大半を占める。完形度については、原形に近いもの、半分以上の原形を成すもの、半分以下の原形にとどまるものが、ほぼ割合で混在している。さらに、礫の円磨度で観てみると、円垂円に近いものと角、垂角に近いものが約半数ずつを示している。なお、散礫相互で17組の接合関係が認められ、周囲の礫群の構成礫との接合関係も数点、確認されている。

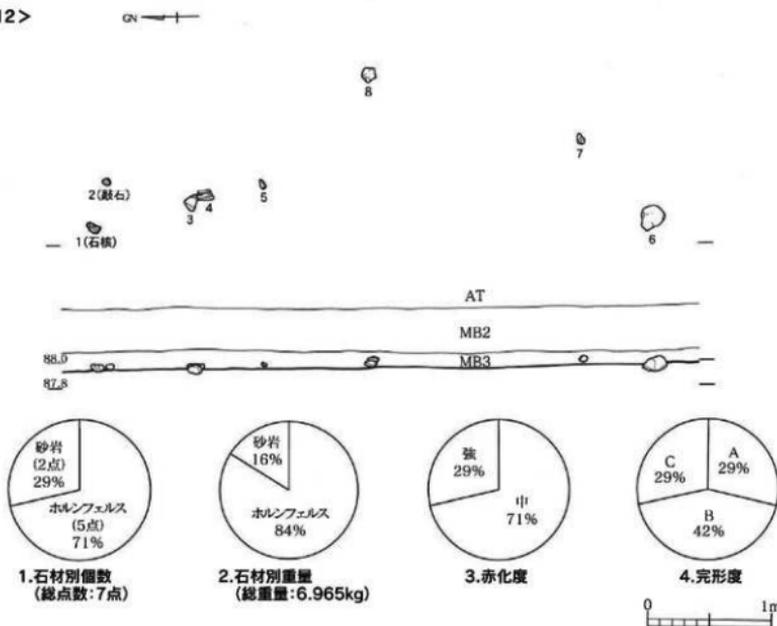


第11図 旧石器第I期 (MB3: 第IX b層) 石器材礫分布 (S=1/400) 及び礫属性図

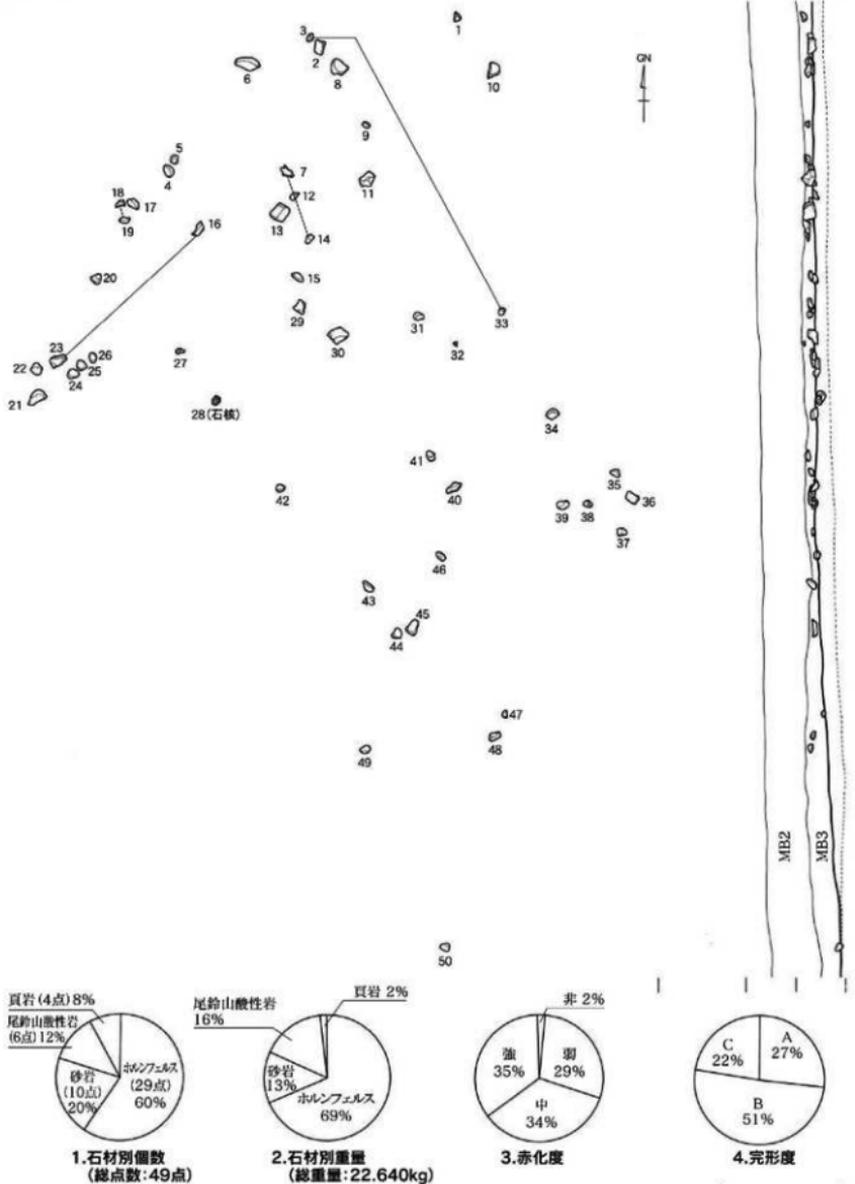
<SI11>



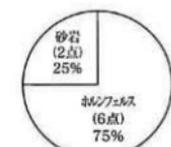
<SI12>



第12図 旧石器第1期 (MB3: 第IX b層) 礫群実測図 (S=1/40) 及び礫群属性図 (1)



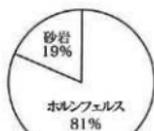
第13図 旧石器第1期 (MB3: 第IX b層) 礫群実測図 (S=1/40) 及び礫群属性図 (2)



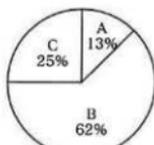
1. 石材別個数 (総点数: 8点)



3. 赤化度

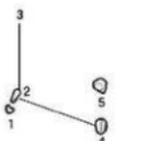
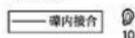


2. 石材別重量 (総重量: 4.015kg)



4. 完形度

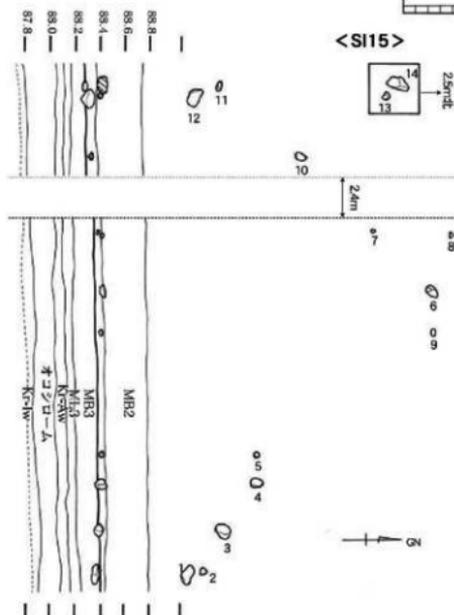
<SI14>



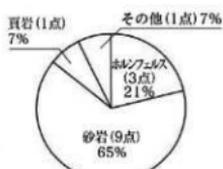
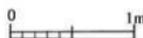
9 (燧石)
8

7 (燧石)
6

78
88



<SI15>



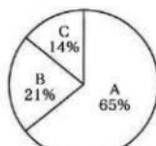
1. 石材別個数 (総点数: 14点)



3. 赤化度



2. 石材別重量 (総重量: 8.620kg)



4. 完形度

第14図 旧石器第I期 (MB3: 第IX b層) 礫群実測図 (S=1/40) 及び礫群属性図 (3)

2 第I期の遺物

出土石器は104点である。器種の内訳は、スクレイパー1点、石核1点、打面再生剥片1点、二次加工剥片3点、敲石3点、剥片89点、砕片5点、原石1点となり、原石も含めたスクレイパーや敲石等の典型的ツールは、10点で全体の9%である。また、石材の内訳は、ホルンフェルス54点、頁岩46点、砂

岩1点、黒曜石2点、チャート1点で、ホルンフェルスが全体の52%、頁岩が全体の44%を占める。製品類の多くは持ち出された可能性が高い。第15図に器種別遺物分布状況を示した。調査区南部を中心に剥片やチップが出土しており、また、礫群のSI12、SI13と遺物分布の重なりも確認できる。接合個体数は5組であった。

第9表 旧石器第I期 (MB3:第IX b層) の石器・石材組成

| 石材 器種 | ホルンフェルス | 頁岩 | 砂岩 | 黒曜石 | チャート | 計 |
|----------|---------|----|----|-----|------|-----|
| スクレイパー | 1 | | | | | 1 |
| 石核 | | 1 | | | | 1 |
| 打面再生剥片 | | 1 | | | | 1 |
| 二次加工剥片 | | 3 | | | | 3 |
| 敲石 | 1 | 1 | 1 | | | 3 |
| 剥片 | 52 | 37 | | | | 89 |
| チップ | | 3 | | 2 | | 5 |
| 原石 | | | | | 11 | 11 |
| 計 | 54 | 46 | 1 | 2 | 1 | 104 |

(1) ホルンフェルス (第19図～第20図)

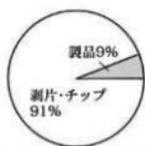
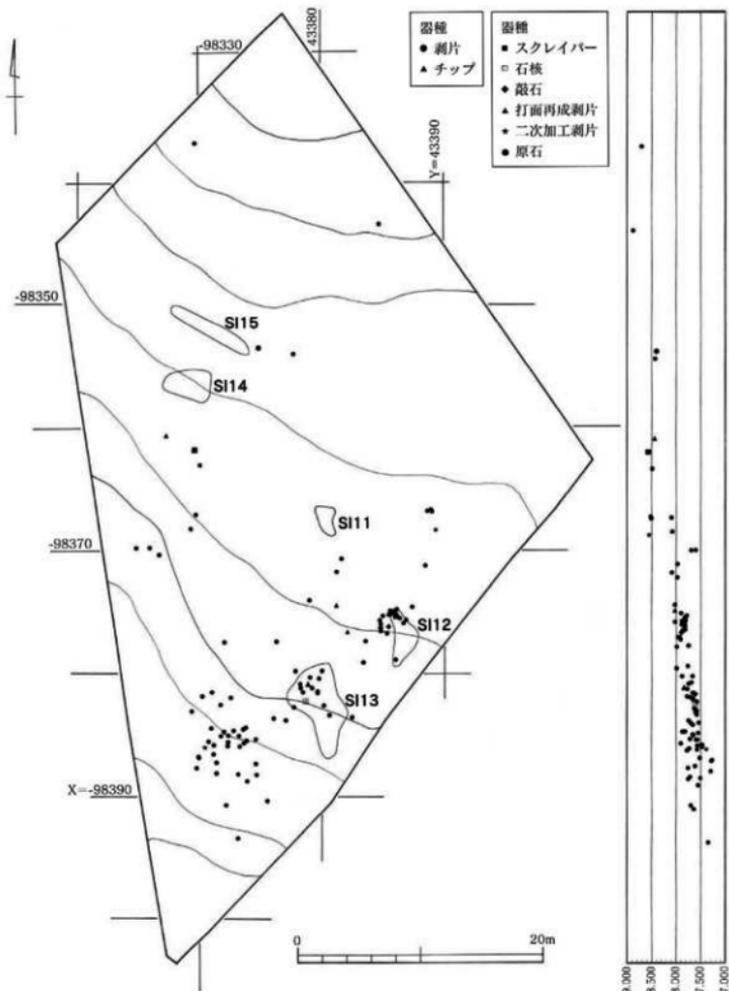
1は、敲石である。やや縦長の亜円礫の上部と下部を敲打面とし、特に上部に顕著な敲打痕を残す。2～3、5・6は剥片である。また、上部の打面が顕著に残り、5以外は背面や側面に自然面を有する。4は厚めの縦長剥片素材を素材とした二次加工剥片であり、末端部にスクレイパーエッジ状の二次加工痕が観察される。

(2) 頁岩 (第20図)

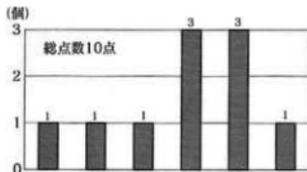
7・8は、二次加工剥片である。7は、左側縁部全体にわたり、不規則で細かな加工痕を残し、右側縁部中央にも1箇所加工痕を有する。8は、右側縁下部と左肩部に連続的な加工痕を残す縦長剥片である。9は敲石である。縦長の楕円形頁岩礫の上部と下部に敲打面を有するが、最頂部や最下部より若干左右にずれた位置に敲打痕を残す。また、左側面に縦長の磨痕跡を認める。

(3) 砂岩 (第20図)

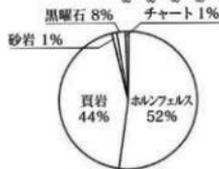
10は、敲石である。長径12cm強を測る亜円礫の両側縁、上部・下部に敲打面を残し、敲打痕も同面上に確認できる。必要に応じて敲石を回転させながら使用したものと推察される。ところどころに亀裂を確認できる。



1. 製品及び剥片・チップ比較
(総点数:104点)

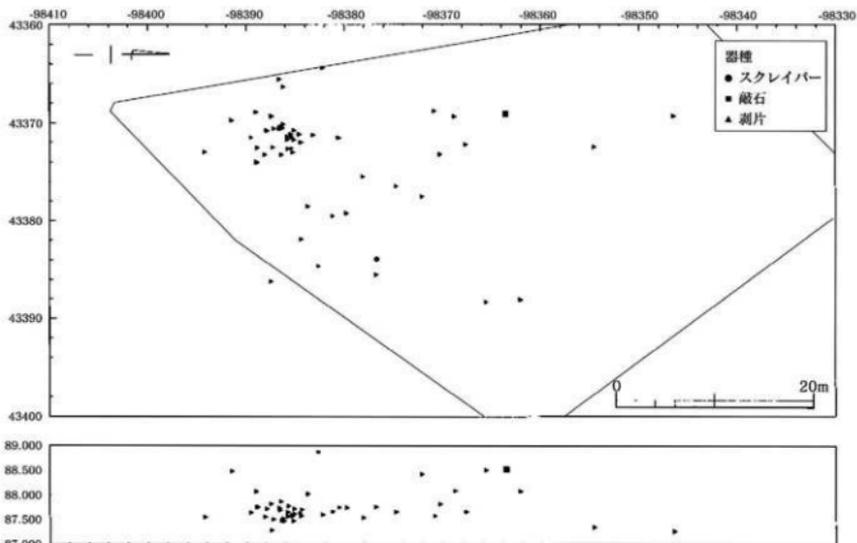


2. 器種別出土数(剥片・チップは除く)

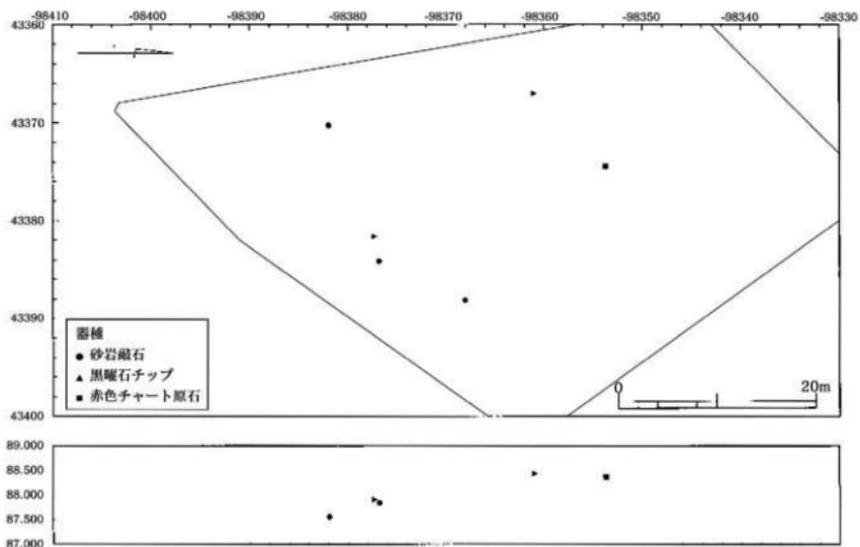


3. 石材別出土数
(総点数:104点)

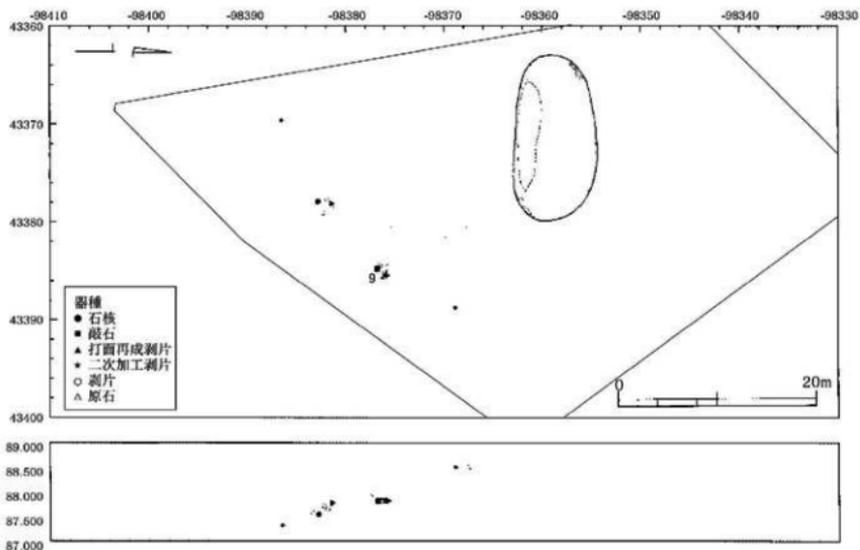
第15図 旧石器第I期 (MB3: 第IX b層) 器種別遺物分布図 (S = 1/400) 及び遺物分析図



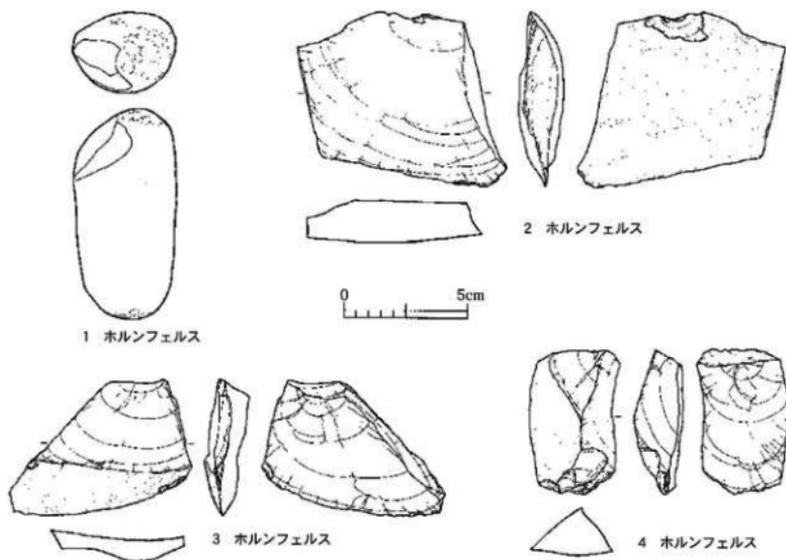
第16図 旧石器第I期 (MB3: 第IX b層) 石材別 (ホルンフェルス) 遺物分布図 (S = 1/500)



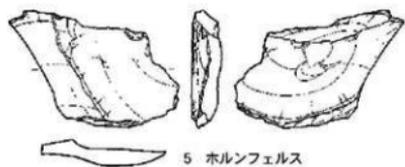
第17図 旧石器第I期 (MB3: 第IX b層) 石材別 (砂岩・黒曜石・チャート) 遺物分布図 (S = 1/500)



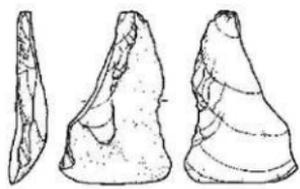
第18図 旧石器第1期 (MB3: 第Ⅸb層) 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S=1/500)



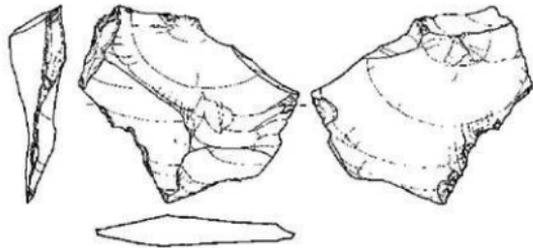
第19図 旧石器第1期 石器実測図 (1) (S=1/2)



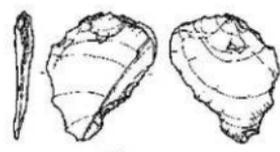
5 ホルンフェルス



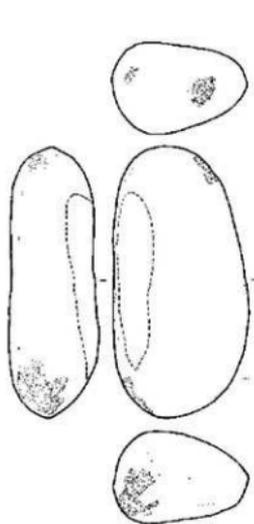
6 ホルンフェルス



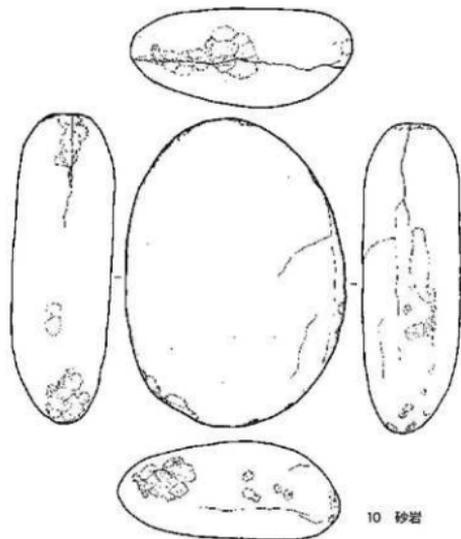
7 頁岩



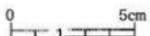
8 頁岩



9 頁岩



10 砂岩



第20図 旧石器第1期 石器実測図 (2) (S=1/2)

第4節 第Ⅱ期の遺構と遺物

1 第Ⅱ期の遺構

遺構として、礫群が2基検出された。その概略は第3表に示したが、全体的な特徴としては、第Ⅰ期同様、比較的大きめの完形の円礫～亜角礫で構成され、礫の密集度が低く散漫な状態で検出されたことが挙げられる。構成礫の個数は、10個前後と少なく、礫群内、礫群間での接合はなかった。また、総出土数1000点を越える遺物集中域（石器ブロック）も1箇所確認された。

第21図は、2基の礫群の分布状況と散礫の出土状況を示している。調査区中央より東側に接近して2つの礫群、SI9とSI10が分布している。周囲の散礫の分布は、散漫で礫群との関連は特に認められない。調査区北部に砂岩を中心とする散礫の集中域が存在する。

(1) 礫群

SI9 (第22図)

調査区中央部東側、D41グリッドにて検出された。長径約3m、短径約1.5mの範囲に長径1cm～5cmの礫が9個で構成される。MR2のブラックバンドと

呼ばれるクラックの発達した硬質黒色土中に20cmから70cmの間隔を置いて平坦かつ散漫に分布する。構成礫は、砂岩5点、尾鈴山酸性岩類3点、ホルンフェルス1点で、砂岩が総重量の6割強を占める。赤化した礫は7点でそのうち3点は赤化度強を示す。また、ほとんど赤化の見られない礫も2点認められた。さらに5点の礫が原形に近い完形度であった。礫群内接合、礫群間接合は認められないが、検出範囲内で2点の敲石が出土した。

SI10 (第22図)

SI9の南、約2.5mの調査区中央部東側、D43グリッドにて、SI9に隣接する形で検出された。長径約3m、短径約1mの楕円形の範囲内に大小11個の礫が見られ、MB2中に掘り込みを伴わず、平坦に散在している。構成礫は、ホルンフェルス5点、砂岩4点、尾鈴山酸性岩類と頁岩各1点を数え、総重量の6割強をホルンフェルスが占める。全ての礫が赤化しており、内訳は強1点、中4点、弱6点である。また、半数以上の6点の礫が、原形に近い完形度であった。礫群内接合、礫群間接合は認められないが、検出範囲内で2点の黒曜石裂片が出土した。いくつかの礫は、立てたような状態で（普通に置くと倒れる）検出された。

第10表 第Ⅱ期の礫群の諸属性

| 礫群番号 | 番号 | 石 材 | 赤化度 | 付着物 | 完形度 | 形状 | 円磨度 | 重量 | 備 考 |
|------|---------|---------|-----|-----|-----|----|------|------|----------|
| SI9 | 1 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 2320 | |
| | 2 | 砂岩 | 強 | 有 | B | 扁平 | 亜角 | 1140 | |
| | 3 | 尾鈴山酸性岩類 | 強 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 695 | |
| | 4 | 尾鈴山酸性岩類 | 非 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 1725 | |
| | 5 | 砂岩 | 強 | 有 | A | 扁平 | 亜円 | 555 | |
| | 6 | — | — | — | — | — | — | — | 敲石(1861) |
| | 7 | 砂岩 | 弱 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 410 | |
| | 8 | 尾鈴山酸性岩類 | 非 | 有 | A | 扁平 | 円 | 395 | |
| | 9 | — | — | — | — | — | — | — | 敲石(1863) |
| | 10 | ホルンフェルス | 中 | 有 | B | 扁平 | 亜円 | 210 | |
| SI10 | 11 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 985 | |
| | 1 | 砂岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 185 | |
| | 2 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | B | 扁平 | 亜円 | 550 | |
| | 3 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 2770 | |
| | 4 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 円 | 130 | |
| | 5 | ホルンフェルス | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 1100 | |
| | 6 | 頁岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 亜円 | 75 | |
| | 7 | ホルンフェルス | 強 | 有 | C | 扁平 | 亜円 | 1345 | |
| | 8 | 砂岩 | 弱 | 無 | A | 扁平 | 円 | 1485 | |
| | 9 | 砂岩 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜円 | 150 | |
| | 10 | 砂岩 | 中 | 無 | A | 楕 | 亜角 | 180 | |
| 11 | 尾鈴山酸性岩類 | 中 | 無 | C | 扁平 | 亜角 | 1450 | | |

(2) 石器ブロック

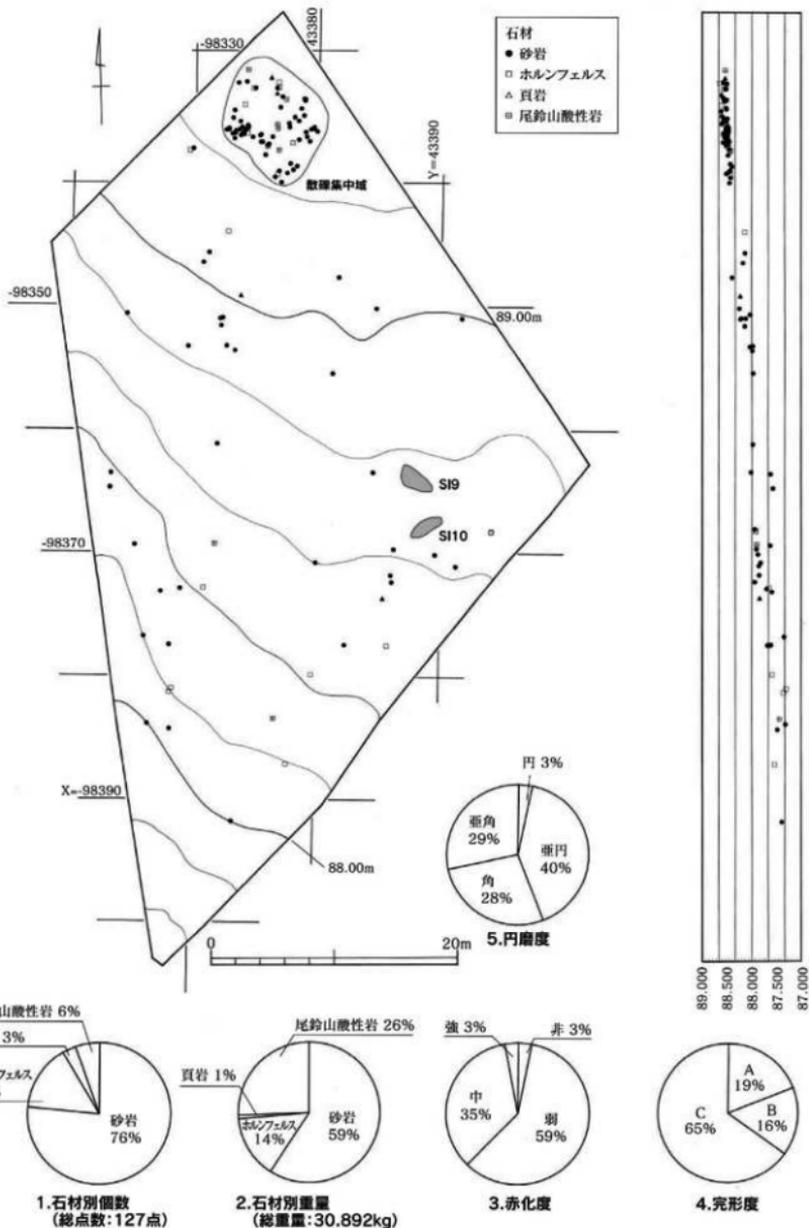
第23図に石器ブロックの分布状況を示した。調査区最北部のA31～34グリッドのAT直下、MB2上層より、約1000点を超える遺物が出土した。内訳の概要を述べると、器種ではナイフ形石器、挟入石器、スクレイパー、石核、敲石、二次加工剥片、原石と多数の剥片、砕片が出土した。また、石材は頁岩、ホルンフェルス、黒曜石、砂岩、尾鈴山酸性岩類、チャートに分類できる。全体的にみると頁岩の剥片・砕片が大半を占めているが、原石、敲石、そしてその敲石で割り出された素材剥片により作り出された諸製品（ツール）まで出土数こそ多くはないが、まんべんなく出土している点は興味深い。接合資料も多く、何らかの営みが行われたことが推察できるが、調査区全体の中で捉えたとき、他の礫群や周囲の散礫との関連の推察はやや困難である。さらにその出土範囲が、約10m四方の1グリッドに限られていたことや、出土層がMB2上部であったことなども特徴として挙げられる。調査区以外の範囲にさらなる遺構や石器集中域が存在した可能性も決して否定できない。継続調査中の四次調査の結果を期待したい。

なお、遺物や接合資料、接合関係図については、本節の「2 第Ⅱ期の遺物」で石材別に具体的に触れている。

(3) 散 礫

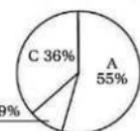
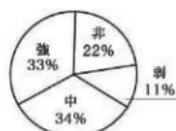
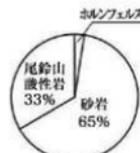
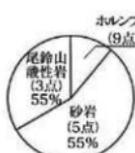
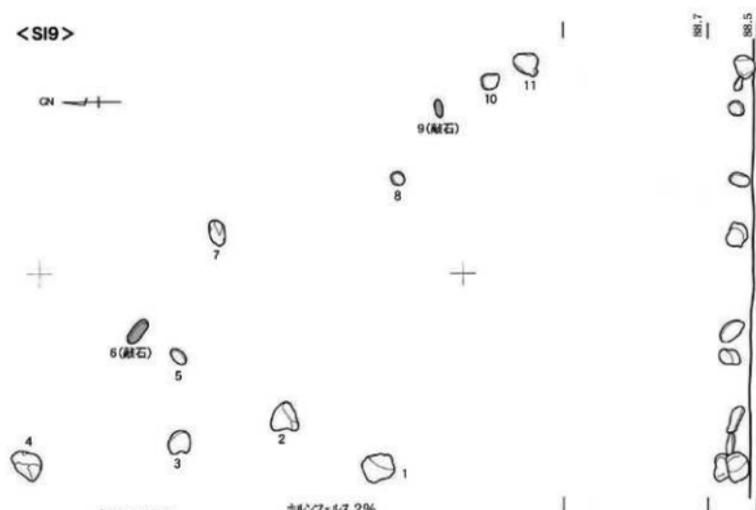
第21図に、石材別の散礫出土状況と属性を示した。石器ブロックとほぼ同範囲にあたる調査区最北部のA31～34グリッドに集中域が1ブロック確認でき、それ以外の区域には砂岩を中心に礫が散漫に分布している。この旧石器第Ⅱ期（MB2：第IX a 層）の出土礫総数は127点であるが、その8割近くが砂岩である。構成礫の個数こそ少なかったが、同層検出の2つの礫群も砂岩の占める割合が高かったこととも一致している。石材別重量を見ても総重量の60%を砂岩が占めている。また、全体的に、礫は赤化はして度は低く、完形度も原形をとどめるものは少ない。さらに円礫と角礫の割合もほぼ同じであることがわかる。集中域の礫は、約80個を数え、全出土礫の6

割を占める。石材もやはり砂岩が多く、次いでホルンフェルス8個、尾鈴山酸性岩類5個、頁岩2個となる。また、この集中域は先に概説した同層出土の遺物集中域（石器ブロック）とも一致するが、この石器ブロックは剥片・チップも加えると、頁岩が9割以上を占めており、石材分布において異なる結果を示している。また、散礫同士の接合関係についても調査した結果、本文化層では、18組の散礫相互の接合が確認された。

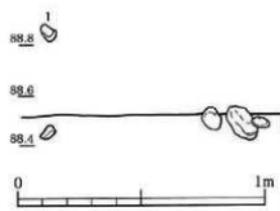
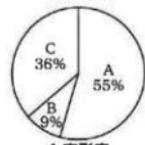
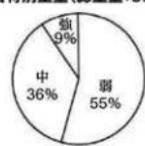
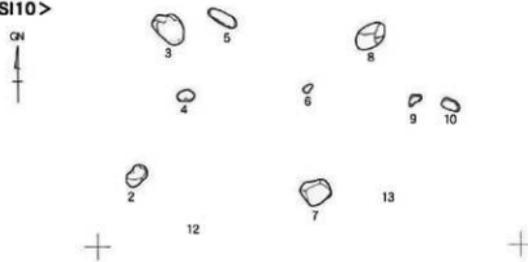


第21図 旧石器第II期 (MB2: 第IX a層) 石材別確分布図 (S=1/400) 及び礫属性図

<SI9>



<SI10>



第22図 旧石器第II期 (MB2: 第IX a層) 礫群実測図 (S=1/20) 及び礫群属性図

2 第Ⅱ期の遺物

出土石器は1272点である。器種の内訳は、ナイフ形石器17点、挟入石器3点、スクレイパー5点、石核9点、二次加工剥片11点、敲石13点、剥片857点、砕片356点、原石1点となり、原石も含めたスクレイパーやナイフ形石器等の典型的ツールは、59点で全体の5%である。また、石材の内訳は、ホルンフェルス126点、頁岩1126点、砂岩5点、尾鈴山酸性岩類1点、黒曜石13点、チャート1点で、頁岩が全体の89%、ホルンフェルスが全体の10%と両石材で全体の99%を占める。調査区最北部の遺物集中域（AT直下のMB2：第Ⅸa層）を中心に、個数で全出土石器の95%を剥片と砕片が占めており、同域出土製品類との関連（原石、敲石、そしてその敲石

で割り出された素材剥片により作り出された諸製品まで、出土数こそ多くはないが、まんべんなく出土している）から、石器製作の場として機能していた可能性も否定できない。

第23図に器種別遺物分布状況を示した。調査区最北部には、A31～A34グリッドを出土範囲とする10m四方の遺物集中域（石器ブロック）があり、調査区南部には、剥片・砕片とともに散在する製品の分布状況が確認できる。同文化層で検出された2基の礫群の位置も示したが、S110と遺物分布に若干の重なりが認められる。接合資料は集中区を中心に76組が確認された。全ては図化できないが代表的なものを実測図と石材別分布図上の接合関係図に示した。

第11表 旧石器第Ⅱ期（MB3：第Ⅸa層）の石器・石材組成

| 器種 \ 石材 | ホルンフェルス | 頁岩 | 砂岩 | 尾鈴山酸性岩類 | 黒曜石 | チャート | 計 |
|---------|---------|-------|----|---------|-----|------|-------|
| ナイフ形石器 | 3 | 14 | | | | | 17 |
| 挟入石器 | 2 | 1 | | | | | 3 |
| スクレイパー | 3 | 2 | | | | | 5 |
| 石核 | 3 | 5 | | | 1 | | |
| 二次加工剥片 | 2 | 9 | | | | | 11 |
| 敲石 | 6 | 1 | 5 | 1 | | | 13 |
| 剥片 | 101 | 747 | | | 9 | | 857 |
| 砕片 | 6 | 347 | | | 3 | | 356 |
| 原石 | | | | | | 1 | 1 |
| 計 | 126 | 1,126 | 5 | 1 | 13 | 1 | 1,272 |

(1) ホルンフェルス

（第26図～第28図、第39図～第40図）

接合資料89（11～25）は、石核1点を含む15点から成る。握り拳大の原石の周囲を、大きく剥ぎ、面を形成した後、石器の素材剥片となる縦長剥片を11から24の順に多数剥出している。いずれも、形成された打面の上部から加撃を加えられており、厚さ5mm程度の確認された剥片は14点（うち、割れと思われる5点は接合し、1個体とした）を数えるが、有効な石器素材は得られなかった様である。最後に、25の石核が残された。

接合資料87（26・27）は、スクレイパー1点を含む2点から成る接合資料である。27は、上部を除く石器周囲に腹面から細かな調整を加え、刃部作出を施したラウンドスクレイパーである。26は、同ラウンドスクレイパー作成時に剥離された剥片である。刃部調整前に剥出されたものと推定される。

接合資料31（28～32）は、挟入石器2点を含む5点から成る接合資料である。上部からの加撃により、28、29、30、31、32の順に、大小の縦長剥片を剥出する。うち、30は右側縁部に、31は左側縁部に腹面から調整を加えられた内湾する刃部があり挟入石器

とした。

接合資料90(107~117)は、11点から成る。両面を分割もしくは剥出された手の平より若干小さめの扁平形の亜円礫を正面図右肩部より下に向かって107、108、109の順に剥出した後、90度後方に倒し、左側面下部に加撃を加える。110、111と剥離した後、裏返して右回転を加えながら、112、113、114、115と順に剥離している。ここで180度回転し、116を剥離し、最後に117を剥がす。残核は残っておらず、持ち出されたか、廃棄されたと推察する。

33~35は、ナイフ形石器である。33は横長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。34・35は、縦長ないし不定形剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。35は裏面基部にも若干の加工が認められる。

36・37は、スクレイパーである。36は右側縁下部に腹面からの細かな調整があるサイドスクレイパーである。37は左右両側縁に腹面からの細かな調整を加え刃部作出を施したサイドスクレイパーである。

38は、二次加工剥片である。左側縁上部に腹面からの剥離痕があり、右側縁上部には背面からの剥離痕がある。

39、40は、敲石である。39は上部と下部に敲打痕を残し、右側面に磨痕を認める。40も上部と下部の2箇所に敲打痕を残す。

41は、剥片である。3片に割れているが、左側縁部の自然面に剥離痕を残す。

(2) 頁岩(第31図~第39図、第41図~第45図)

接合資料38(42~52)は、剥片11点から成り、剥離作業工程は2段階に分かれる。aの段階では、42、43、44の順に縦長剥片を剥出する。各剥片とも自然面に剥離痕を残す。43は、剥離作業に伴う割れを確認できる。bの段階では、全て同じ打面方向で、45、46、47、48、49、50、51、52の順に縦長剥片を剥出していく。各剥片には打面の異なる不定形剥片の剥離痕がある。残核は確認していない。

接合資料55(53~58)は、石核1点を含む6点から成る。上部からの加撃により、53、54、55の順に剥片を剥出する。その後、右方向に90度回転し56を剥出した後、さらに180度回転し57を剥離し、最後に

残核である58が残る。なお、いずれの剥片も縦長剥片であり、表面には数箇所の剥離痕が残る。

接合資料32(59~61)は、二次加工剥片1点、二次加工剥片1点を含む3点から成る。まず、上部からの加撃により59を剥出する。59は、左側縁部に腹面からの剥離痕が認められる二次加工剥片である。その後上部からの加撃により縦長剥片である60を剥離し、さらに再び上部からの加撃により61を剥出する。61は縦長剥片を素材とし、底部先端から左右に鋭角に広がる部分に、腹面からの細かな調整による刃部作出を施した二次加工剥片である。

接合資料36(62~67)は、7点の剥片から成る。剥出された剥片はいずれも縦長剥片で、上方からの加撃により、62から67の順に自然面側から剥離されている。うち、62・65・68の3点は、剥出の際の加撃による割れを伴う。残核は確認していない。

接合資料24(69~85)は、二次加工剥片2点と石核1点を含む17点から成る。握り拳大程の亜円礫の表皮を剥がしながら石核の形を整え、打面を設ける。この打面からの剥片剥離の作業工程を説明するために、3つの分割資料(a・b・c)に分けたが、この分割資料は剥離順に沿ったものではないので、図面上の配列と実際の剥離順は一部前後している。最初の打面から、二次加工剥片である69、70を剥離する。ここで、新たな打面を設けるため打面を変え、77、78、79の順に剥離する(77+78+79は打面再生剥片である)。この再生された打面をもとに、71、72、73、74、75、76の順に上からの加撃により剥片剥離を行っている。ここで打面をかえるために180度回転し、80、81を剥出する。その後、右回転しながら82、83さらに下方の84を剥離し、最後に残核である85が残る。

接合資料53(86~90)は、ナイフ形石器1点と二次加工剥片1点を含む5点から成る。まず、上方からの加撃により86を剥出する。86は縦長剥片で、基部から左側縁部にかけて腹面からの一側縁加工が施されているナイフ形石器である。その後、右方向に45度回転し、87、88の順に割れを伴う縦長剥片を剥出した後、再度左に45度回転し、89、90を剥出する。89は、上方の打面に当たる剥離面上にさらに微細刺

離痕の残る二次加工剥片である。

接合資料63(91~93)は、3点の剥片から成る。いずれも縦長剥片で、上方からの加撃により91、92、93の順に剥離される。

接合資料88(94~106)は、打面再生剥片1点と石核1点を含む13点から成る。接合資料の全面に大小の剥片を剥出した痕跡があり、その後、さらに石器の素材剥片を剥ぎ取っている。まず、上面からの加撃により、94を剥離した後180度回転し、95、96(2つの割れを接合)を剥離する。その後、再び180度回転してもともどり97、98、99の順に剥離する。そして、ここで90度回転し、打面再生のために100を剥離する(100は打面再生剥片)。なお、101、102は、100を剥離する際に割れを伴い同時に剥がれたものと思われる。その後、新たな打面をもとに103、104、105と剥出し、最後に残核として106が残った。

118は、スクレイパーである。大きめの縦長剥片を素材とし、下部に腹面側より調整が施されて刃部が作出されている。

119は、挟入石器とした。横長剥片を素材とし、左側縁部及び右側縁部下方に腹面より調整が加えられた内湾する刃部が最低でも2箇所は確認された。

120~122は、二次加工剥片である。120は右側縁部の剥離面上に腹面側からの剥離痕が残る。また、左側には挟入石器にも似た腹面からの内湾した加工痕がある。その延長上の突出した先端部にまで微細な加工痕が認められる。121は、左側の剥離面上に腹面から2箇所の二次加工が施されている。122は複数回の剥片剥離の痕跡が認められるが、その反対側の自然面状に腹面からの細かな二次加工が施されている。

123~134はナイフ形石器である。長さ2cm~4cmほどの大きさで、細かな調整の施された3cmにも満たない小型のものが主流を占める。123は、縦長剥片を素材とし、バルブを除去してブランディングを施した部分加工のナイフ形石器である。124は縦長片を素材としたナイフ形石器である。基部側を欠損する。125は横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器であり、ブランディングには対向調整が観察される。126・127は縦長ないし不定形剥片を横

位に用いた二側縁加工のナイフ形石器である。128・129・131・132は縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。130は、大きめの横長ないし不定形剥片を素材とし、右側縁は基部から胴部にかけて腹面からの挟入状の加工が施されている。また、左側縁は基部より少し間を空けて腹面からの加工が施されている。133は、縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器であり、ブランディングには対向調整が観察される。134は、横長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。先端部を欠損する。

135は石核である。打面転移を繰り返して、不定形剥片を作出している。

136、137は、剥片である。136は横長剥片で右側縁に腹面からの剥離痕が残る。137は縦長剥片で背面の上部から右肩部の剥離面上にさらに小さな剥離痕が残る。

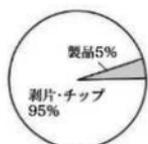
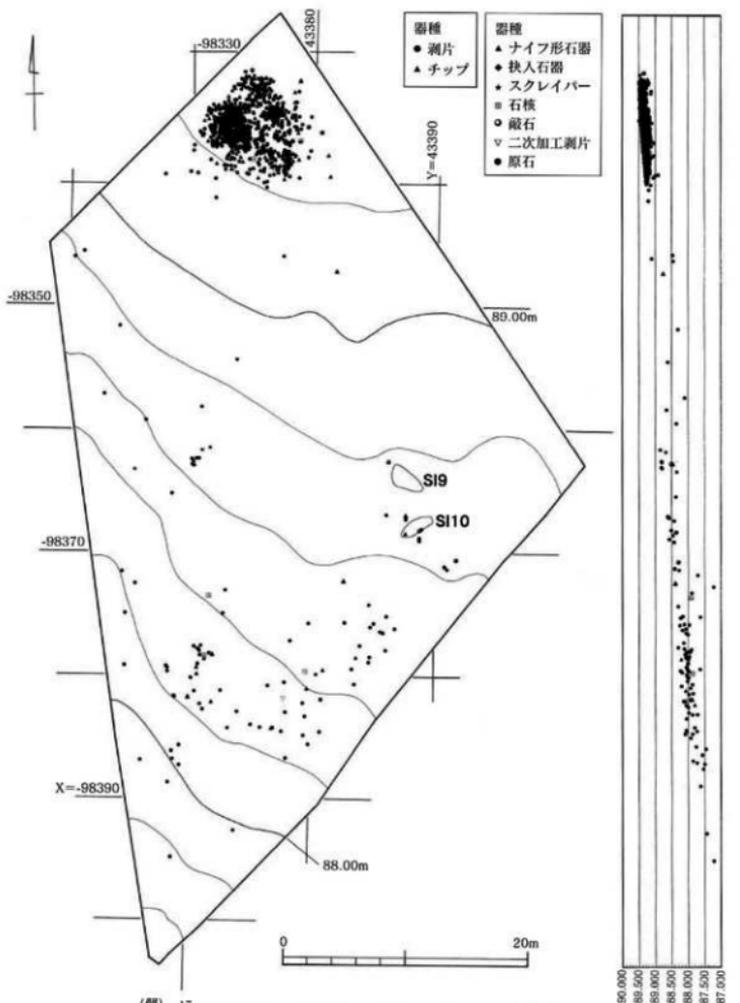
(3) 黒曜石(第45図)

138は縦長ないし不定形剥片を生産した石核で、裏面は自然面である。黒曜石の産地は不明である。

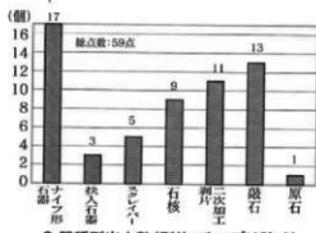
139・140は剥片である。いずれも寸詰まりの小形剥片であり、桑ノ木津留産と思しき黒曜石を用いている。141は、石核ないし分割産である。使用石材はやはり桑ノ木津留産と推定される。

(4) 砂岩(第45図)

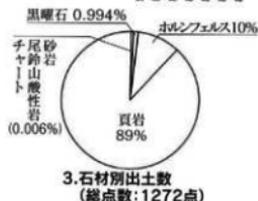
142~144は敲石である。142は棒状礫の一端にやや不明瞭な敲打痕を有する。また、背面と腹面には広い範囲に磨面が認められる。143は亜円礫の下部と左右両側縁中央部に顕著な敲打痕が残る。底部の敲打面が平坦に潰れている。144は下部に敲打痕を残す。143同様、底部の敲打面が平坦に潰れている。



1. 製品及び剥片・チップ出土数 (総点数: 1272点)

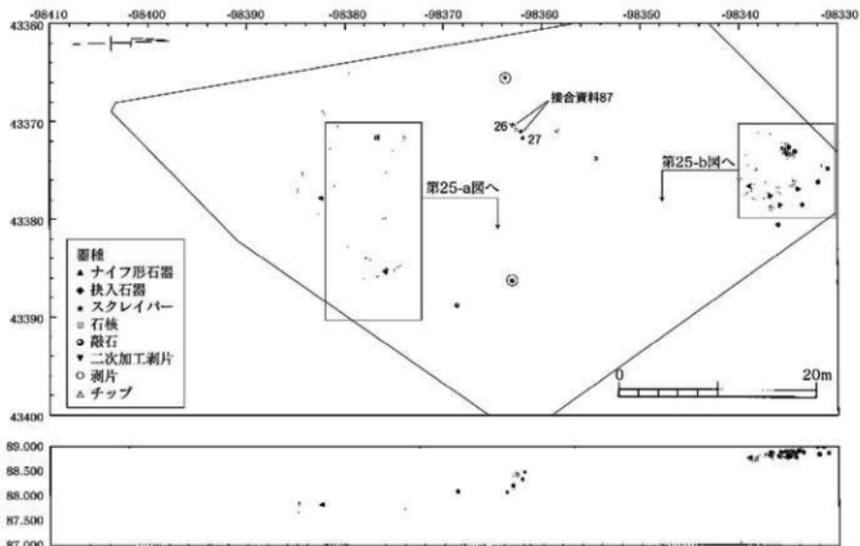


2. 器種別出土数 (剥片・チップは除く)

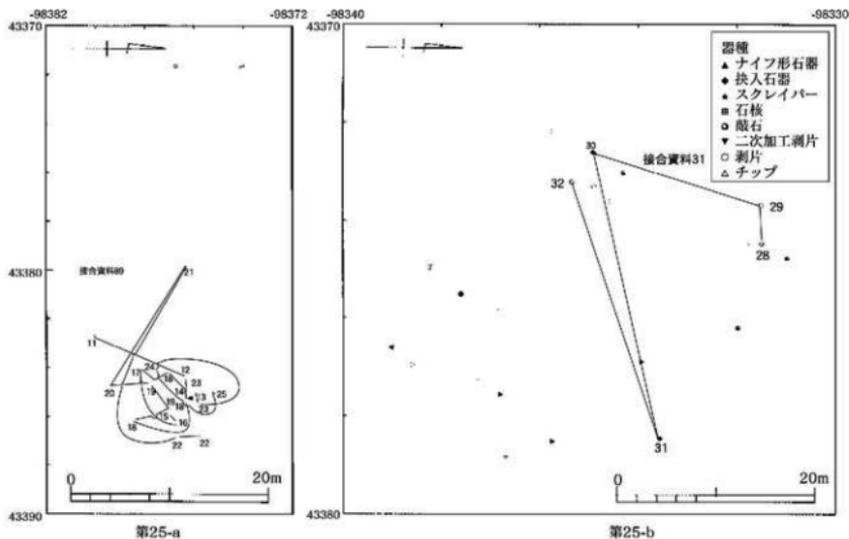


3. 石材別出土数 (総点数: 1272点)

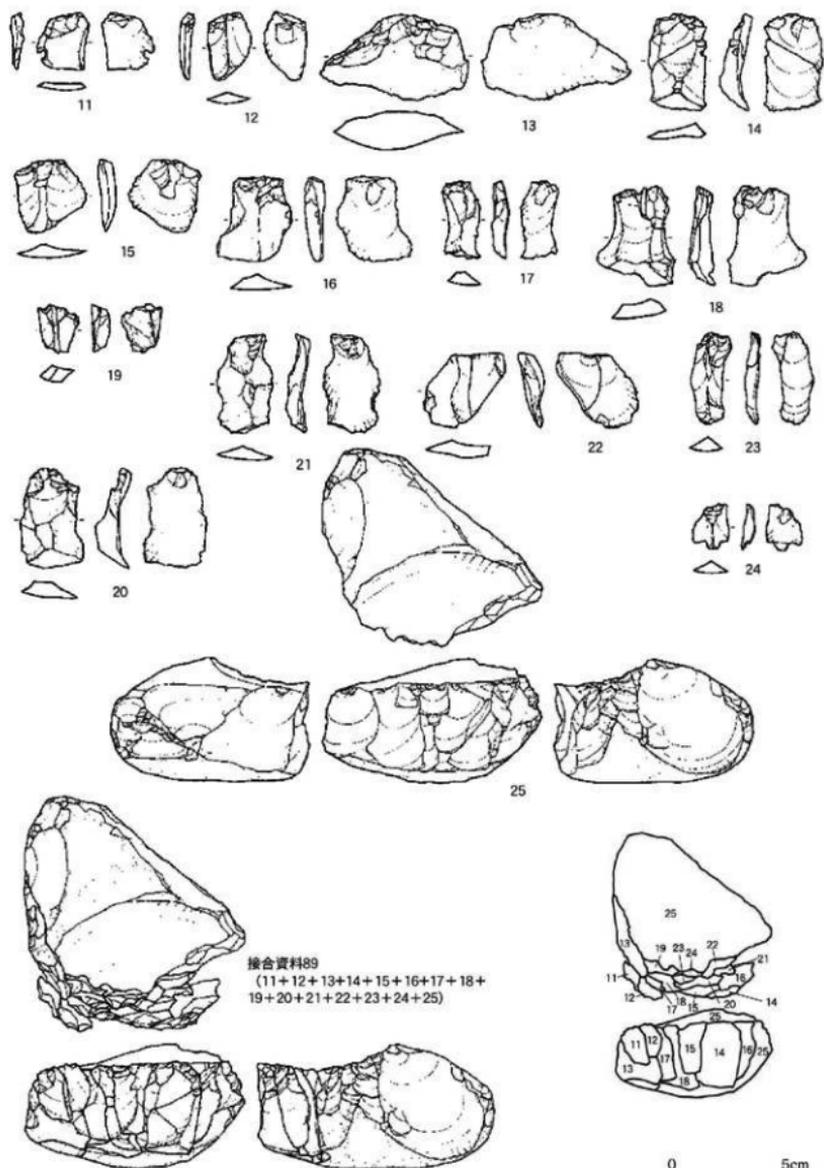
第23図 旧石器第II期 (MB2: 第IX a層) 器種別遺物分布図 (S = 1/400) 及び遺物分析図



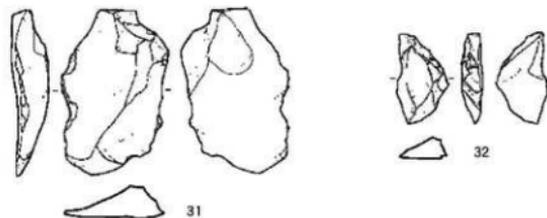
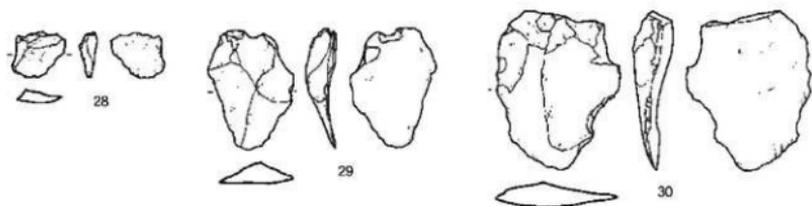
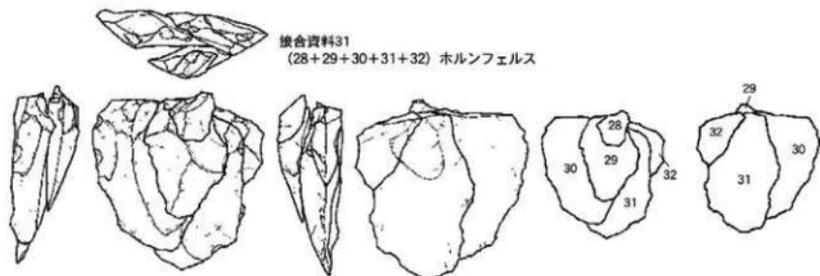
第24図 旧石器第II期 (MB2: 第IX a層) 石材別 (ホルンフェルス・頁岩) 遺物分布図 (S=1/500)



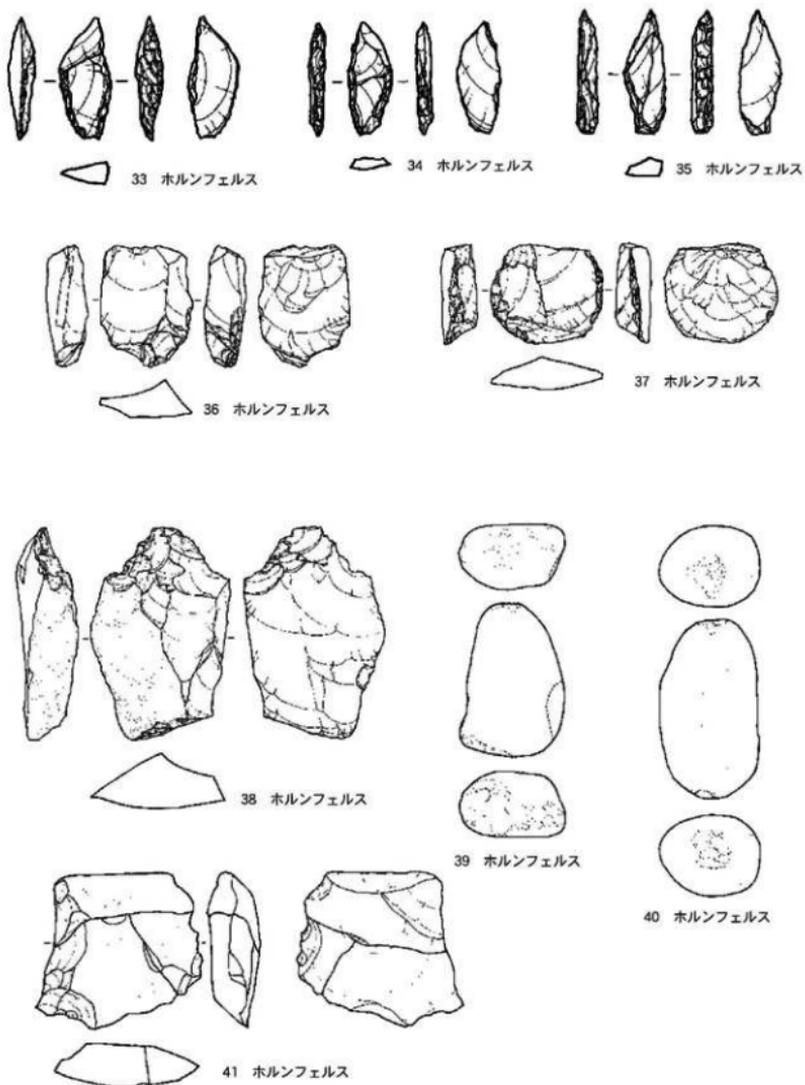
第25図 旧石器第II期 ホルンフェルス接合関係図



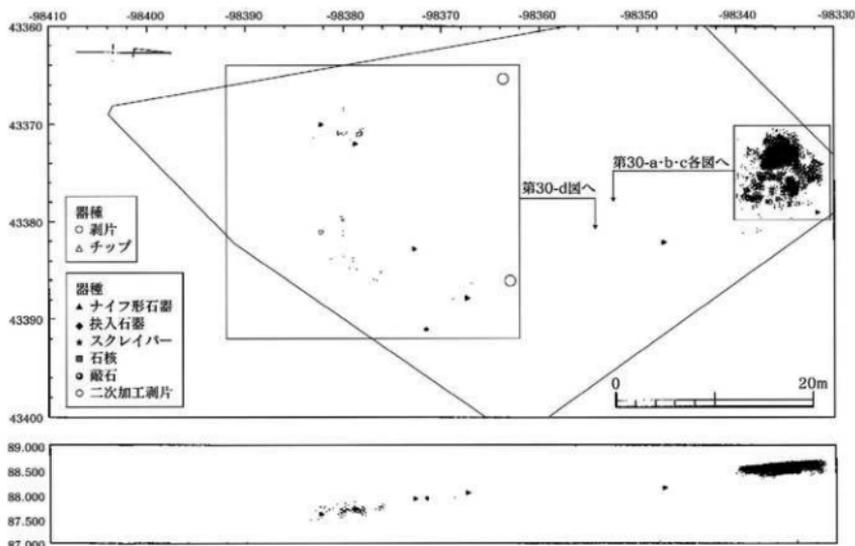
第26図 旧石器第II期 石器実測図 (1) (S=1/2)



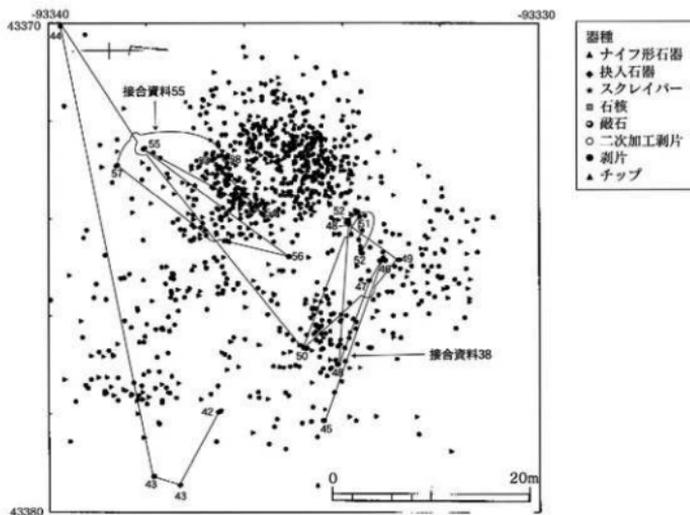
第27図 旧石器第II期 石器実測図 (2) (S=1/2)



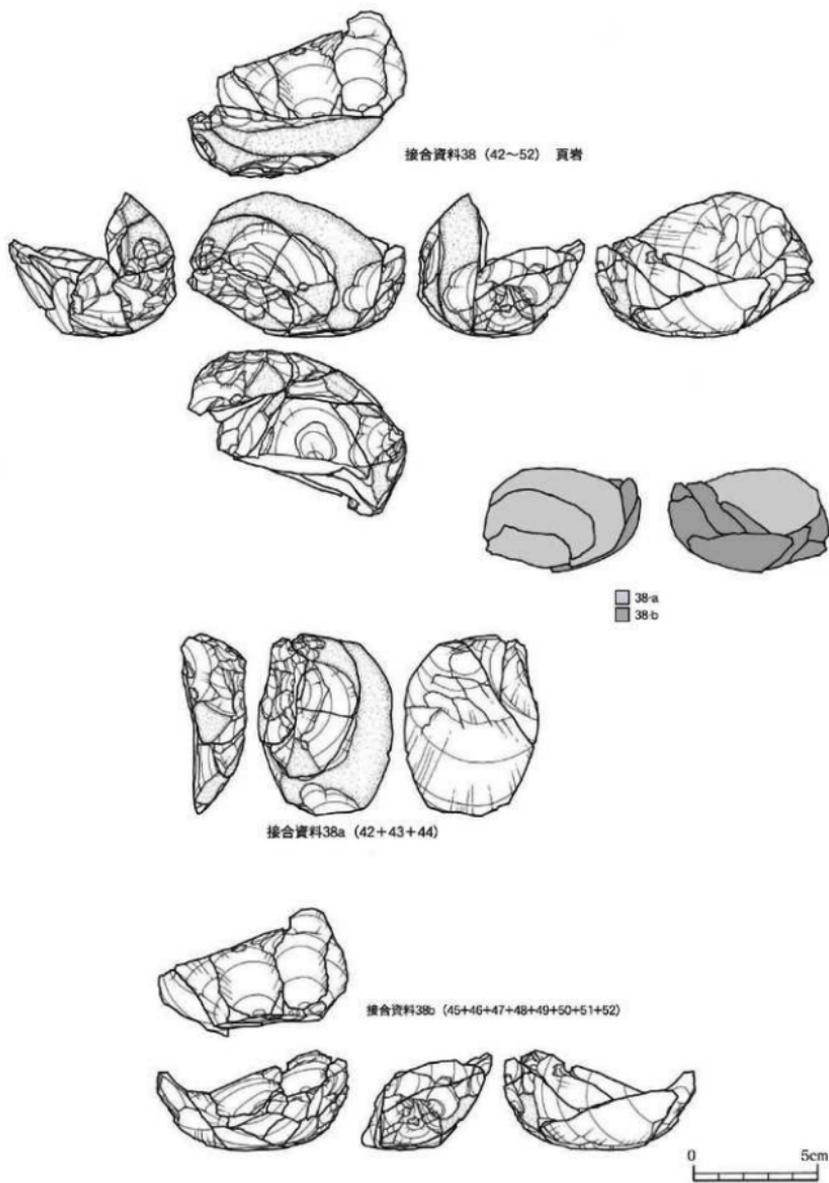
第28図 旧石器第II期 石器実測図 (3) (S=1/2)



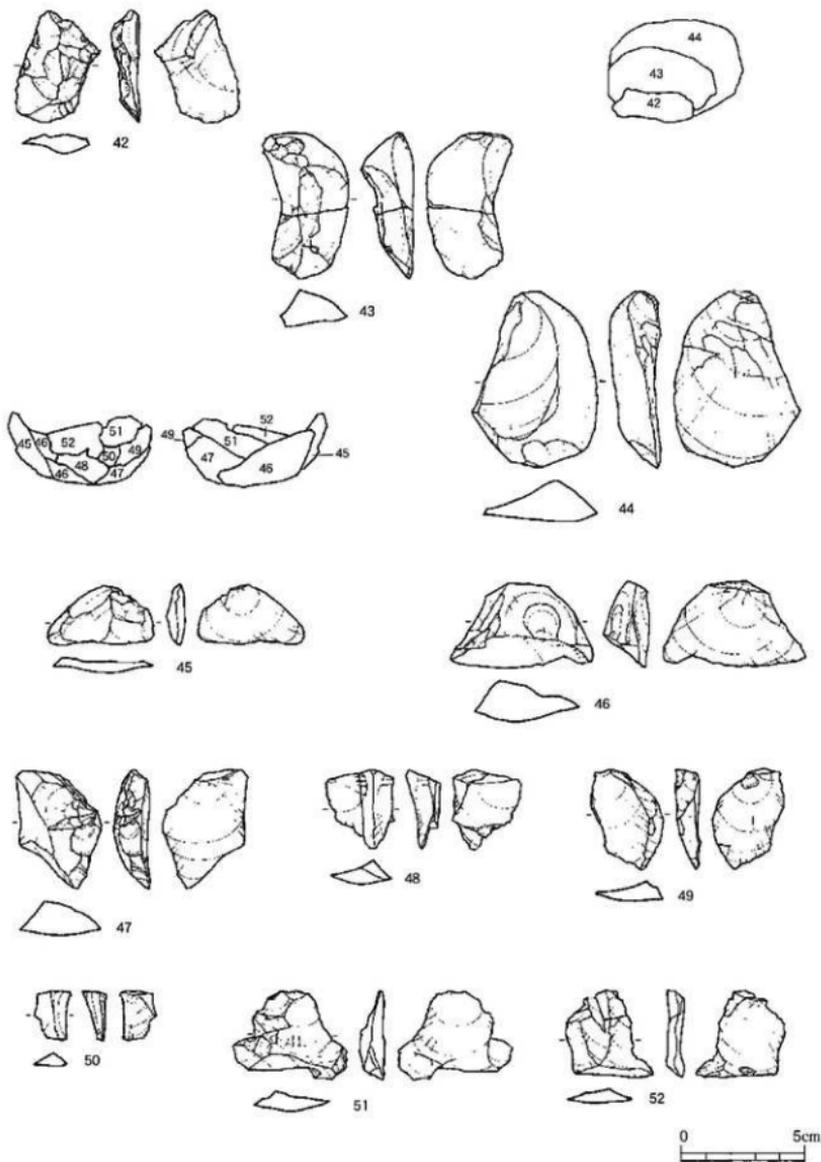
第29図 旧石器第Ⅱ期 (MB2: IX a層) 石材別 (頁岩) 遺物分布図 (S = 1/500)



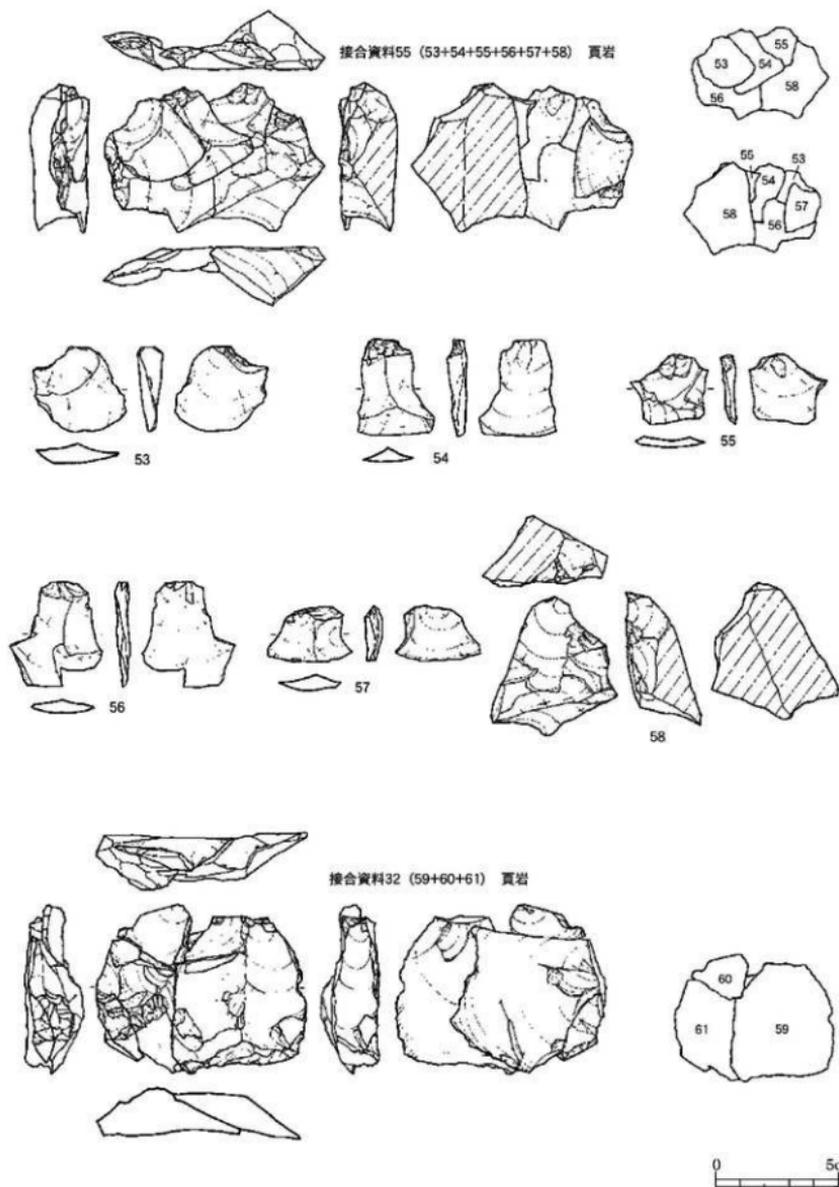
第30図 旧石器第Ⅱ期 頁岩接合関係図① (接合資料38・55)



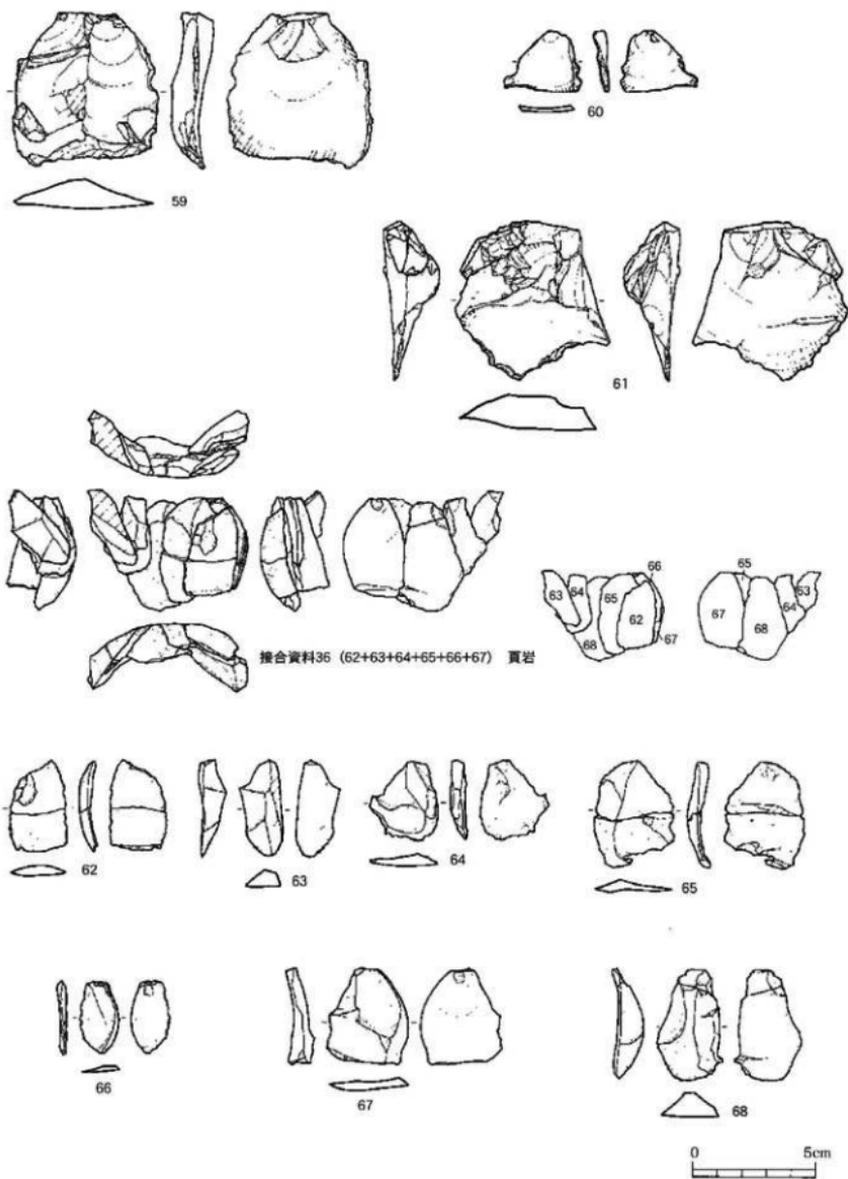
第31圖 旧石器第II期 石器実測図 (4) (S = 1/2)



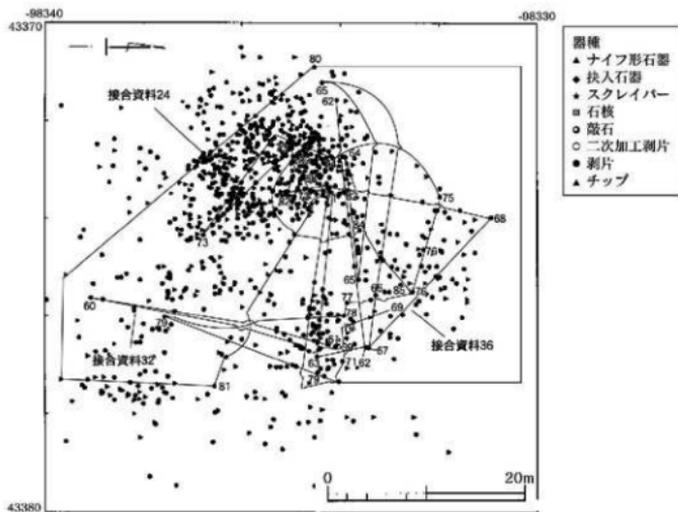
第32图 旧石器第II期 石器实测图(5) (S=1/2)



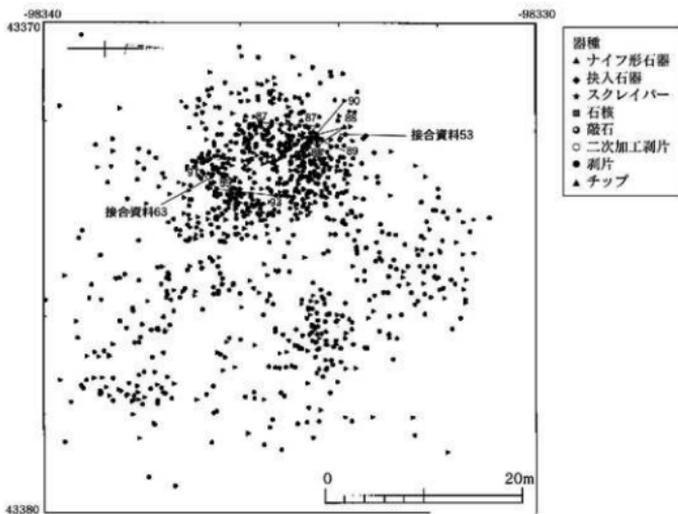
第33圖 旧石器第II期 石器実測図 (6) (S=1/2)



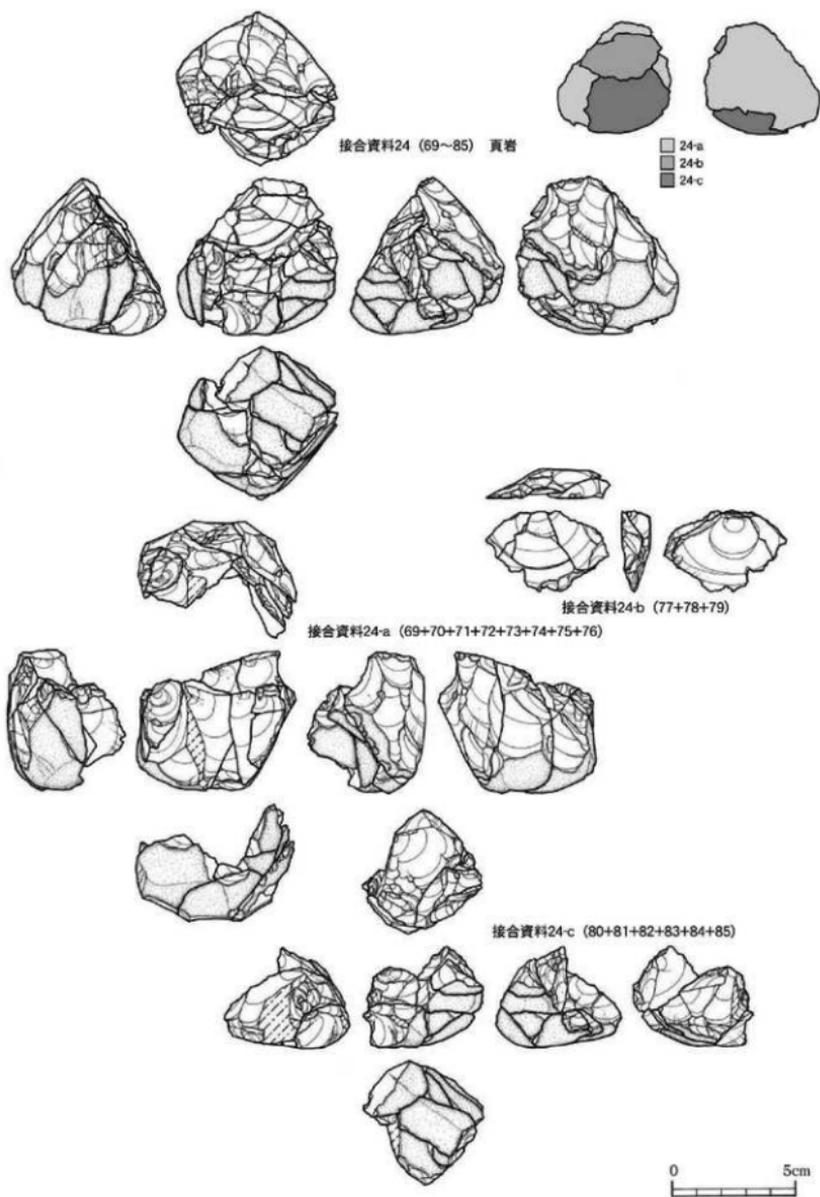
第34图 旧石器第II期 石器实测图 (7) (S=1/2)



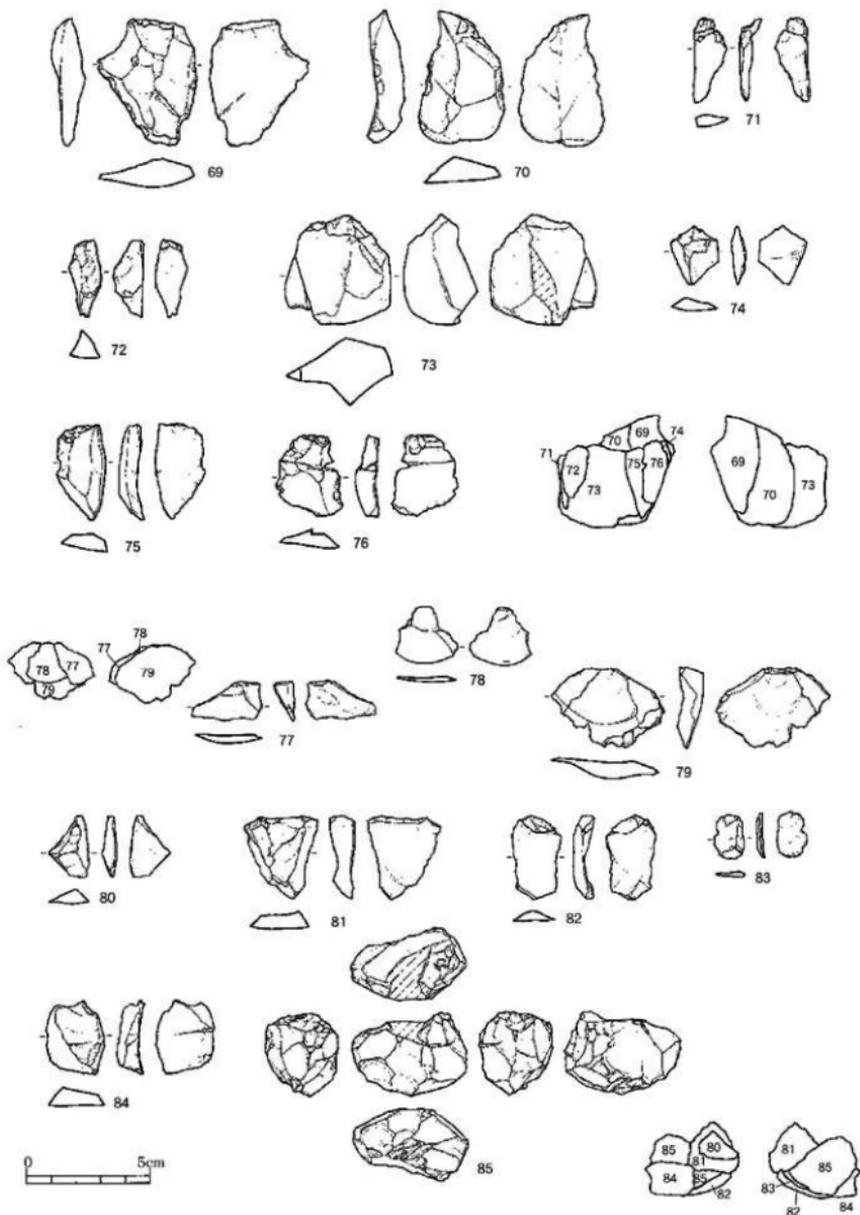
第35図 旧石器第II期 頁岩接合関係図② (接合資料24・32・36)



第36図 旧石器第II期 頁岩接合関係図③ (接合資料53・63)



第37圖 旧石器Ⅱ期 石器実測図 (B) (S=1/2)



第38图 旧石器第II期 石器实测图(9) (S=1/2)